

小説「北の街に春風が吹く」ある町の鉄道の話」

JRに乗り続け隊 友田 博

・プロローグ

北の小さな海辺町。昔からある駅前食堂のコンクリの打ちっぱなし床の中央に置かれた灯油ストーブには大きなおでん鍋がかけられている。北国であるがためか、この店では一年を通じておでんを提供していて、店の名物となっている。

石井雄二はストーブ近くのテーブルに座り、先ほどから静かにそのおでんと日替わりの定食を食べている。冬場には珍しく青空が広がりカーテンのない窓の外から太陽の日差しが差しこんでいる。地面には昨日まで降った雪が一面に積もり陽光が反射して一層まぶしい。

食堂亭主の黒岩五郎は、雄二が食事をするのをずっと見つめていたが、ひと通り食べ終えたところで声をかけた。

「石ちゃん、お茶はいるか？」

「あつ、すいません」

雄二は日頃から口数は少ない方だが、五郎とは古くからのつきあいで気兼ねなく話ができる関係だ。

「線路が無くなってから石ちゃんが、うちに来るのは久しぶりだな」

「ええ、あの時は溜萌線の存続のための調査によくこっちに来てましたね。廃線になってからはご無沙汰してばかりですいません。このおでん、久しぶりに食べられて良かったです」

「今日は車なんだろ。酒は飲めねえな」

「ですね。ちよつと残念ですが。列車で来れば熱燗もらうところですけどね」

「確かなな。車かあ、そのせいだろうな、酒の注文も最近はず減ったよ」

「ほんとうにすみません」

「いいんだよ。元々最近の若いやつは熱燗なんて飲まないしな」

「若いひとは車があたりまえだけど、列車にも乗ってもらいたいって思いますね。あの時は鉄道のこと、いろいろ教えてもらったのに結局役に立てずに申し訳なかったです」

「石ちゃんは沼太の人間だからな。気にするな。俺たち足毛の人間がもっと反対しないといけなかったんだ。線路が廃止されて後悔する前にな」

そこまで聞いてから雄二は聞きたかったことを勇気を出して口にした。

「五郎さんは線路が廃止になったから鉄道会社を辞めたんですか？」

五郎はしばらく考え、そして告白するかのように口を開いた。

「ま、他にも理由はあるが、やっぱりそうなのかもしれないな」

「会社辞めて、もうどれくらい経ちます？」

「去年の十二月からかみさんを手伝っているから、ちょうど一年だ」

「そんなに。もう、今からは車で来るしか出来ないけど、また食べに来ますよ」

「ああ、そうしてくれるとありがたいよ。最近、かみさんも元氣なくしてな。前は駅に降りた人が少なからず食べに来てくれてたんでな。この店もいつまで続けられるかわからないから、来るなら早めに来てくれよ」

「そんなこと言わないでくださいよ。奥さん、ずっと食堂を切盛りしてくれてたんでしょ？ 五郎さんが一緒にお店出

来るようになったんだから、もっと、頑張ってください」

「ああ、そう思いたいけどな。やはり瑠萌からの列車があったらなあ」

「私たちも、路線の一部廃止だったとしても、もう少し協力して頑張れば良かったんですけど。すいません」

「何度も言わなくていい。ずっと瑠萌線は赤字だったんだからな。HRも民営会社になったんだ。生き残るためにはしかないことだったさ。俺も個人的には線路は無くなって欲しくないと思ってたが、駅に勤める身で会社の方針には反対しにくかったしな。でも今はやっぱり後悔してるよ」

「そうだったんですか？」

「自業自得さ」

「でもな、大人は車で自由に動けるけど、子供と年寄りには運転出来ないしな。バスだと倍の時間かかるみたいで、人からそういう話を聞くとなんかつらいんだ」

「私もバスには、…まだ乗ってないです。なにかバスに乗り換えるくらいならって思って、沼太から車で来てしまします」

「道路は最近、ほんと良くなったからなあ」

そう言うと五郎は厨房の中へ引っ込んでいった。雄二は既

に冷えてしまったおでんの汁を一気に飲み干した。

一昨日まではひどい吹雪が続いたが、昨日になって青空が出て逆に妙に暖かい気候となった。最近はこのような極端に変わる天候が増えたと雄二は感じる。ふと窓の外を見やると、雪が屋根に積もった旧足毛駅の建物が見える。その白一色の景色の中に雪かきのために周辺の人が集まっているのを見つけた。その賑わいを見ると、廃線以前の駅の賑わいの情景を思い出す。

だが、もう感傷に浸っている状況ではないことに雄二は気付いていた。今度は自分たちの町を走る線路が無くなる危機が近づいているのだ。列車が到着することの無くなった駅を見ながら、後悔だけはしないようにやれることをやらなければならぬと思った。

・第一話 列車に乗ってでかけよう

「明日のことなんだけど、十時に沼太駅前で待ち合わせでいい？」

僕は、彼女が提案に賛成してくれるかを心配しながら電話をかけている。だが予想した通り彼女の反応は否定的なものであった。

「えっ、駅って？ 明日は車で行くんじゃないの？」

「いや、列車で行こうと思うんだけど……」

自分の声が少しずつ小さくなるのが分かる。逆にスマホのスピーカーから聞こえる吉田さんの声は一気に大きくなる。

「えーっ！ どうして？ なんか列車で行かないといけない理由があるの？」

「うーん、それが…、ちょっと…、親父からの頼みもあって。」

鉄道にぜひ乗ってくれて頼まれたんだ。最近、鉄道が変わったから試しに乗ってみてくれって」

「どういうこと？」

「ごめん、俺もこっちに帰ってきてから、車しか乗ってなかったんで良く分からないんだ。でも、親父がHRのモニター

用の定期をくれたんだ。それを使えば、どこまでも乗って良いからって。だから明日はその定期を使ってみたいんだ」

「石井君はその定期で乗るって言うけど、私は……？、私は切符を買わなきゃいけないの？」

彼女の不満がさらに爆発する。てっきり自分の家まで車で迎えにきてもらえらると思っていたのだろう。

「あつ、でも吉田さんの切符代は俺が出すから心配しないでいいよ」

「え、いいの？ そんなつもりで言ったんじゃない？」 否定はしようとしていたが、切符を買わなくて良いと知ったからか、少しか彼女の言葉が穏やかになる。

「というか、親父がスポンサーでお金を出してくれるんだ。だから心配しないで」

「石井くんのお父さんって、確か役場で働いてたよね。あの静かな感じの……」

「あ、うん。今、なにか役場で溜萌線の存続問題について色々HRともめてたらしいんだけど……、吉田さんと、明日動物園に行くって言ったら、なんか嬉しそうに僕に定期を渡してくれたんだ。どうもうちの家族分作ってくれてるみたい」

「へえ、なにか理由があるのかな？」

「口数が少ないから、あんまり詳しく説明してくれた訳じゃないんだけど、とにかく列車で行ってほしいって頼まれて…、なんとなく断れなかったんだ」

「分かったわ。お父さんから頼まれたのなら仕方ないよ。いいよ。とにかく明日は沼太駅前で十時に待ち合わせで良いのね？」

「うん、それでお願いします。それで十時二〇分発の列車に乗ろうと思う。時刻表見たら列車も一時間に一本は走るように増えてるみたい」

「へえ、それは助かるね。じゃ明日ね」

「うん、明日」

彼女がOKしてくれたので一安心したが、僕自身もドライブを楽しみたかったこともあり、複雑な気持ちで電話を切った。

僕は石井圭介。北海道の空知管内にある沼太町に住む社会人一年生だ。今、電話をしていた相手の吉田さんはこの町の小中学校時代の同級生。高校からは別々の学校に進み、大学

はお互いに故郷を離れて、僕は東京、彼女は札幌で四年を過ごした。就職にあたっては、二人とも悩んだけどお互いに地元での発展のために頑張ろうという意志をもって戻ってきた。ひと月ほど前に町の青年会議所が主催する懇親会で久しぶりに再会して、同級生のよしみで一緒に食事をする仲になった。

たまたま朝日川にある動物園に久しぶりに行ってみたいという話で盛り上がり、僕も最初はドライブを計画していたのだ。本来なら動物園で楽しんで、その後も車で少し遠回りをして、うまくいけば夕食も一緒に。そして…と。男にありがちな都合の良い妄想を夜な夜なしていた。

ところが、日頃あまり話をしない父親からの突然の頼みのために、妄想ドライブは、すべてぶち壊しとなった。自分では完ぺきな計画だったので、各駅停車の列車で出かけるふたりの姿も想像しなくなかった。断りたかった。断れば良かった。でも、断れなかった。

親父からの頼みであったことも事実だが、それ以上に社会人一年目で購入した車のローン返済のために続く貧乏生活が恨めしかった。奨学金の返済もある。交通費やデート代を

出してくれるという親父の狡猾な提案に飛びついてしまった自分が情けなかった。

金銭的な事情で列車で行くことになったのだが、この彼女とのデートで新しい鉄道そして北海道の未来がスタートすることを、この日の僕はまだ気付いていなかった。

僕は札幌に本社を置く農作物を加工する会社にこの春から勤めている。所属は朝日川支店だが、会社が地元の特産品の掘り起こしに力を入れており、沼太町の特産品であるトマトについて地元出身の僕があてられたということだ。地元の人間なら死ぬ気で頑張るだろうとの会社のもくろみなのであろう。主な業務内容は生産者との仕入れの交渉、調整であり、商品の宣伝もさせてもらっている。

就職してから三か月が経ち、朝日川の事務所まで車で出社する日もあるが、大半は沼太町周辺の農家に直接出向くため通勤の面では楽であった。町内では通常、自動車ばかり乗っているため、鉄道の利用は本当に久しぶりだ。

デート当日の朝、車を石狩沼太駅に停めることにした。田舎の駅なので正規な駐車場は無いが、駅を利用する人が少な

いのでいつでも駅前のスペースが空いていることは知っていた。知っていたはずだった。

しかし、駅に着くと驚いたことに車がいっぱいだ。高校の通学で三年間利用したが、こんなことは今までに一度もなかった。親父が「鉄道が変わったから」と言っていたが、これがそのことだろうか？慌てて空きスペースを探す。すると、僕の車を見つけたのだろう、吉田さんが僕の方へと駆け寄ってくる。

「石井くん、あっち、あっち。私、お母さんに送ってもらったんだけど、今からスペース空けてもらうから、そこに停めたいよ」と言ってくれた。

「えっ、お母さん？お母さんが一緒なの？」

吉田さんのお母さんは地元でもちよつとした有名人なので、僕も少しは知っている。お母さんは駐車場を確保するためでなく、娘と遊びに出かける僕を一目見ておくために待っているのではないかと少しだけ疑った。吉田さんの後をついて行くと、お母さんが車を駐車場から移動させているところであった。車を止められることになったのは助かるが、吉田さんのお母さんにあいさつとお礼をしなければいけない

という別の問題が発生し、僕の頭はパニックとなる。

(なんてあいさつしよう?)

お母さんとの初対面が近づき鼓動が速くなる。車から降り、とりあえずお辞儀をする。

「おはようございます。駐車できて助かりました。僕、吉田さんの同級生で石井といいます」

あいさつやらお礼やら自己紹介が慌ててごちゃ混ぜとなった言葉が初めての会話となった。どのようにあいさつすれば良かったんだろうと後悔する。そして、今の挨拶もどう思われただろうと心配になる。鼓動はさらに速くなる。

「あ、あかりの母です。石井くん? 役場にお勤めの石井さんのお子さんよね。確か東京の大学に行ってらっしゃったのよね」

吉田さんの実家は地元の土木関係の会社だ。社長のお父さんと一緒にお母さんも役員として働いているとのことだったが、キャリアアウーマンの雰囲気は漂っている。お母さんのその言葉は「狭い田舎町のことなんて全て頭に入っていますよ、そしてあなたのこともね」と言われているようにも思えた。

高校時代はこの小さな田舎町が嫌いにもなった。都会に憧れる気持ちを抑えられず、真逆的な東京の大学に行かせてもらった。でも、大都会で暮らすうちに、群衆の中で感じる孤独感を知ったことで地元に対する考え方は変わった。離れることで地元の良さも分かったつもりだし、人間関係についてもひとりひとりのつきあいを大切にする方が大事ではないかと気付いたからだ。

でも、さすがに僕や親父のことを色々知っているお母さんの言葉に少し不安になった。

「それにしても石井君のお父さん、日ごろはおとなしい方だけど今回は頑張りなさったねえ。よく、道知事相手に思い切ったもんやねえ。まさか会議室に怒鳴り込むなんてね……」

「えっ? 怒鳴りこむって、どういうことですか?」

「お父さんから何か聞いてないの? いつも寡黙な方だもんねえ。でも、この駅の駐車場の混み具合だって……」

「お母さん、話長い。ほら石井君、もう列車来るよ。急ごつ!」

「うん、でも……」

「そう、じゃ今度はうちに遊びに来てね。ゆっくりお話ししよう。石井君も家に居る時の本当のあかりを見たいんじゃない」

ないの？」

「もう！ お母さんたらっ！ 余計なことは言わなくていいの！」

「それじゃ、失礼します。車、助かりました」

「ホームの上にもけっこう人がいたから急いだほうがいいかもね」

「本当ですか？ じゃ、これで失礼します」

お母さんを振り切るように僕たちは駅舎に飛び込んだ。まず、吉田さんの切符を買おうと窓口へ向かったが、窓口の横に切符の自動券売機があることに気づいた。

「あれ？ 券売機あるよ」

「本当。今までは無かったよね？」

瑠萌線では無人駅がほとんどだが、石狩沼太駅では珍しく券売機は設置されず、窓口で駅員が切符を販売していた。

「あれっ？ これ、指定券も出せるんだ。すごいね」

「あつ、でもICカードしか使えないんだ」

新しい券売機は現金投入口がなく、これからのキャッシュレス社会を見越しているように思えた。北海道鉄道のICカード「HIDACA」をお互いに持ってなかったので仕方

なく僕たちは窓口に並んだ。

「すいません。朝日川まで大人往復一名ください」

「深河から朝日川までは指定とりますか？」

「いや、自由席でいいんですが」

「はい、では。石狩沼太駅から朝日川まで乗車券の往復ですね。二、三〇〇円になります」

駅員は慣れた手つきでタッチパネルを操作し切符を発券した。

「じゃ、これ。吉田さんの切符」

「あつ、ありがとう。なんか悪いね」

「いや、こっちが列車で一緒に行こうって言ったんだから、気にしないでいいよ」

「あつ、ちょっと待ってください」

窓口の駅員が僕たちを呼び止める声が聞こえた。

「今、北海道鉄道で試験的に行っているこの鉄道会員制度のパンフレットをお渡ししておきますので、ぜひご検討ください」

「あ、はい。ありがとうございます。列車の中で見てみます」
急ぎ足で改札を過ぎてホームに出ると、確かに三十人ほど

の人がすでに待っている。

「すごいね。なにか鉄道が変わったっていうのもまんざらでもないかもね」

吉田さんが小さくつぶやく。その時、背後から声をかけられた。いつも聞いているその声で誰かはすぐ判った。

「おう、石井。お前も列車に乗るのか？」

同じ朝日川支店の先輩の山本さんだ。入社十年目の中堅社員で、僕の指導役でもある。この三カ月間は彼と一緒に営業に回っている。すでに結婚もして深河市に奥さんと小さなお子さんがいるのだが、僕の指導役を口実に、この春から沼太町にアパートを借りて月の半分は家に帰らずに単身生活を楽しんでいる。

「あつ、山本さん。おはようございます」

「おつ、お前デートか？ 羨ましいいな…、あれつ、どこかで会ったこと……、あつ、青年会議所の会合でお会いしましたね」

「あつ、はい。石井くんの小中学校の同級生で吉田と言います」

「彼女の実家、沼太土木なんですよ。今年、札幌から戻って

会社手伝ってるんです」

「へえ、それは沼太町としては貴重な女子だね。それにしても石井とデートなんて、もしかして騙されてるんじゃない？」

「山本さん、なんてことを言うんですか！」

「面白い方ですね。でも、大丈夫ですよ。石井くんのこと昔から知っているんです。まあ、確かにしばらく会ってなかったんで、今の彼は良く分かりませんが、頼りない男だったらすぐに見放します」

「おつと、しっかりしてるね。いや、タイプだなー！ 俺が結婚してなかったら、さっそくデート申し込むのになあ」

「もう、いいですよ…、ところで山本さんはどこに行くんです？ 珍しいですね。いつも自慢の愛車はどうしたんですか？」

山本さんの趣味はバイクでのツーリングだ。日ごろならいつもバイクで移動している。

「いや、俺は今日、札幌で飲みごとがあるんで列車にしたんだ。鉄道会員のモニターにも当選したから、列車を使わないとな。ほら、これ」

山本さんはポケットから取り出して僕に定期を見せてく

れた。

「あつ、これ、一緒だ」

「お前も当たったのか？ とりあえず半年間、鉄道あちこち乗ってみるよ。最近バイクばかりだったが、これで鉄道が存続できることになったならいいよな」

「ちよつと私にも見せて。何？ この定期、北海道全線って書いてあるよ。どこまでも乗って良いってこと？ 良いなあ！」

「これは、文字通りそういう意味なんでしょうね？」

僕は今さらだが、父親がくれた定期のすごさを感じていた。

「顔写真貼ってあって、なんか免許証みたいね。モニター用って書いてあるから試験的にやってみたいね。石井君のもこれと同じなの？」

「うん。親父が勝手に作ってくれていたんだけど、もつと説明してくれば良かったのに」

「石井くんのお父さん、役場で働いてるのよね？」

「うん、最初は瑠萌線の活性化の仕事やってたんだけど、そのうち廃線の話が出てきてHRといういろいろもめてたみたいだけど、この前いきなりこの定期で列車に乗ってくれないか

って頼まれたんだ」

「へえ、いいなあ。私も欲しいなあ」

「吉田さんも列車好きなの？」

「いや、私、免許は札幌で取ったんだけど、あまり車の運転好きじゃないって気付いたの。特に長距離の運転。鉄道は不便だけど、列車で行ける所ならそっちが良かな。でも、列車はお金かかるんだよね」

「確かにね。それが鉄道を利用する人が減った一番の原因だよな。北海道は高速道路も多くなったし、列車は荷物があるよね」

「俺も家族がいるだろ？ 車だったら高速だったら車一台分で済むけど、列車だったら人数分の切符がいるんだよ。不便しかも高い鉄道なんて誰も乗るわけないよな」

「で、今度からこの会員パスになるってこと？」

駅員がくれた鉄道会員募集のチラシを見返した。

「年会費で北海道全線が乗り放題？ 本当？」

「えっ、いくらなの？」

「いや、値段は書いてない。でも、今モニター会員で実験中って書いてあるから、やっぱりこのパスがそのことなんだ」

定期の話で盛り上がっていると、ホームに接近のお知らせが流れ列車が近づいてきた。久しぶりに見る列車だった。

「えっ？」みんなが一緒の反応をとった。

以前は一両だけの車両だったが、今日は長く繋がった列車が近づいてくる。ホーム上の僕たちの目の前を通り過ぎる車両を先頭から数える。

「1、2、3、4。4両、えっ、4両もあるよ？」

「すごーい、列車だ！ 列車っ！」

僕たちは初めて子供が列車に乗るときのようにホームの上で驚くばかりだった。

・第二話 列車のふたり

北海道の沼太町は朝日川市から西に車で一時間ほどの山あいにある小さな町である。日本海にも近く、冬は海からの風の影響で雪の日が続く一面が銀世界に覆われる。

その反面、夏は青々とした山と、その谷あいを流れる雪滝（せつりゅう）川を流れる雪解けの清水が流れ、流域に広がる平原を満喫できる。南部には広大な石狩平野が広がり美味しい米の産地でもある。西部は牧場、畑作地帯、北部および東部は山岳地帯となっており、季節の移り変わりを様々な地形と様々に変わる景観で満喫できる。

今は七月。これから十月までが北海道のベストシーズンだと僕は思う。

「すっごーい」

「瑠萌線に4両編成の列車が走ってる。これ、夢じゃないの？」

僕たちが久しぶりの列車に感激していると、山本さんが僕に言った。

「じゃあな。俺は別の車両に乗るから」

「えっ、一緒に乗らないんですか？」

「一緒に乗ってもいいのか？」

「そう言われて、はっとする。」

「あつ、いえ。また月曜日よろしくお願いします」

「ああ。またな。あ、そうだ。今度駅前で朝市を開くらしいから忙しくなるぞ」

「あ、はい。また詳しく教えてください」

山本さんは、最後に僕の耳元まで近寄ると「じゃな、ふたりでよろしくやれよ」と、小声で囁いて「じゃ、吉田さん。私は別の車両に乗りますので」とあいさつをした。

「えっ、一緒に乗らないんですか？」

「ごめん、本当は吉田さんと一緒に乗りたいんだけどね。石井君が来るなって目で訴えてるんで」

「もうっ！ うそつくのはやめてくださいよ」

「うそうそ、俺も人と一緒に行く予定になってるんで、ごめんなさいね、吉田さん、いつかまた機会つくって飲みましよう」

いじわるな言葉とは反対に、気を利かせてくれた山本さんに心の中で感謝した。

「山本さん、引き留めなくて本当に良かったの？」

「いや、本当に他の人と一緒に行くようになってるんだって」僕も話をしれっと話を合わせた。以前ならこういう時も嘘がすぐばれたかもしれないが、東京の四年間で少しはずぶとくなった自分をほめてあげたい。

「早く乗ろう！」

前から二両目の車両に乗り込む。向かい合わせの四人掛けの席が並ぶ車両だ。ちらほら席は空いているが、誰も座っていない席は無いみたいだ。きちんとした身なりの老夫婦が並んで座っている席の向かいが二人分空いていたので、僕はそっちに向かった。

「ここ、座ってよろしいですか？」

「ええ、どうぞどうぞ」

優しそうな感じのご夫人が答える。

「おふたりは、沼太にお住まいの方？」座るか座らないかのうちに夫人から尋ねられた。

「あつ、はい。ふたりとも大学を卒業して春にこっちに戻ってきました。列車は久しぶりに乗ります」

「私たちもほんとに久しぶりなんですよ。お客さん珍しく多

いけど、みんな同じじゃないかしら？」

ディーゼル列車がゆっくりと走り出す。エンジンの音が大きくなる。僕は座っている座席の下を覗いてみる。

「この車両、新しいみたいだけど座席は回らないんですね？」

僕は東京で乗った特急や快速車両のイメージで聞いてみた。

「いや、この車両だけ、わざとこういう風にしてあるみたいですよ。後ろの車両は普通に座席が回転するんだそうです」今度はご主人が答えてくれる。

「なんでも列車でおしゃべりを楽しむために、わざと向かい合わせにしてるって。さっき車掌さんが言われてましたよ」

「えっ？ 車掌が乗っているんですか？ この列車？ ワンマンじゃなくて」

座席のことより車掌が乗っていることを珍しいと思った。いちいち鉄道の変わりぶりに驚く自分をおかしく思うが、声をださずにいられない。それほどにこれまでの列車との違いがある。

「ええ、しかも女性の車掌さんでしたよ」

「えっ、女性の？」

僕が喜ぶそのテンションの高さに吉田さんの目じりが少しあがったことに僕は気づかない。

「私たちは足毛から乗って来たのですが、さっき車内改札を回ってましたよ。私も初めて女性車掌さんを見ました」

「へえ、女性の車掌かぁ。早く見てみたいな」

「でも、あなたたちおふたりと同席できて良かったです。昔の列車はこんな雰囲気でしたからね。向かい合わせた人たちと話をしながらですね」

「僕も高校時代は通学で深河まで通ってましたけど、友達とワイワイしゃべってました」

「そうね。列車の中でお話するのは楽しいものよ。列車はある意味でひとつの社交場だったと思うわ。今日は、残念ながらお弁当はないけれど、……ほら、お家からおにぎりもつてきたのよ。よかったら食べませんか？」

「あつ、ありがとうございます。いただきます」

昼食には、まだ早かったがおにぎりをひとつずつもらって食べた。

「おいしい」

「良かった。二人とも都会でおいしいもの食べてたでしょう

から、おにぎりなんて口に合わないんじゃないですか？」

「いやいや、貧乏学生だったんでカップラーメンばかり食べてましたから」

「でも、列車の中で食べるお弁当っておいしいですよ」

吉田さんがあらためてお礼をいうと、

「おにぎりには……、はい、これ！」

ご婦人はくしゃくしゃのアルミ箔をバッグから取り出すとおもむろに開いた。その中にはあざやかな黄色のたくあんと紫色のしば漬けが入っている。

「合うっ！ この組み合わせは最強ですね」

そして、さらに「お茶は熱いのに限るって思いませんか？」と言って、紙コップに魔法瓶らしいポットから熱いお茶を注ぐと渡してくれた。

「うくん、おいしい」

「日ごろはペットボトルのお茶ばかり飲んでるんじゃないの？」

「ええ。あまり良いとは思ってないんですけどね。つい……」

「今の若い人はお茶の葉から淹れることなんて、ほとんどしないのじゃない？」

「あ、でも私は大学の講義でプラスチックごみの海洋廃棄の問題とかを聞いたりで、ゴミを出さないためにも、あまりペットボトルは買わないようにしてます」

「へえ、そうなの？ 偉いね、吉田さん。あれだよ。細かく砕かれたプラスチックを魚が食べるやつだね」

「そう。マイクロプラスチックって言われてる小さなかけら。結局、その魚を人間が食べる訳だけど……、日本のペットボトル使用量は世界で二番目なのよ」

「うん、人間の経済活動のために地球がもう限界に來ちゃっているかもって。2030年までに人間が暮らし方を変えることが出来ない地球がおかしくなるって。テレビで特番やってた」

その会話を聞いていた主人公が僕たちに言った。

「若い君たちの世代に負の遺産を残すことになるのではないかなと思うながらも、私たちの世代は便利さばかり求めているのかもしれないね」

「地球がおかしくなったら農作物もとれなくなっちゃうからやばいよね」

僕はいつも仕入れをお願いしている農家の人たちの顔を

思い浮かべた。

「どうしてこっちに帰ってらっしゃったの？ 東京や札幌には楽しいこともいっぱいあったでしょうに」

「いや、東京も楽しかったんですけど、とにかくなんでも高いんですよ。金銭感覚も性格的にもちよつとついていけない感じがしました。このおにぎりや漬物食べて、ほつとしてます」

「わしらは足毛で食堂をやってるから思うんだけどね、結局人間って生まれ育った土地の食べ慣れたものが一番おいしいんじゃないかって思うよ」

「あ、わかります。東京でもしやれたレストランとか行って、たっかーい食事したこともあるんですけど……、みんな美味しい美味しいって言うんだけど、素直にはそう思えなくて。たぶん食べ慣れてないからって思いました。大トロとかも脂っぽいの」

「あら、まだ若いのに少し残念ね。今からでも色々試して美味しいものたくさん見つけたらいいじゃないの？」

「いや、都会の生活ってどこかでみんなと合わせないと馬鹿にされるから合わせてる人も多いのじゃないかって思いま

す」

「うん、それはあるかもね。私の周りも残念だけど人の情報を鵜呑みにしがちな子多いよ。特にインスタとかに上がった店ばかりありがたがったり、なんか自分では判断してないよな人が多かったな」

「たぶん人は生まれ育った環境、それこそ水や気候が一番快適に思うように生まれるんじゃないでしょうか？」

「そうだな。じゃなければみんな都会に住んだ方が良くなるしな」

「外国の料理とか、どう見ても美味しくなさそうなものもあるけど、現地の人にはそれが一番ごちそうなんだよ」

僕が漠然と抱いていた疑問が分かったような気がした。

「お金持ちが必ず幸せではないってことですかね？ 僕も沼太町のお米、実家から送ってもらってたんです。でも水がまづいせいか、何か違うって思っていました。でも、こっち帰ってきてからご飯が美味しいってほんと思いました」

「私も札幌だったけど、お母さんのご飯がたべたかったな」「いや、なんか地元に戻ってくることに少しだけ不安もあったんですが、今のおふたりの言葉で自信が持てました。あり

がとうございます」

「いや、なにも。私たちはずっと地元にいるので、広い世界のことを知らんだけです。それはそうと、おふたりはどこまで行かれるの？」

「朝日山動物園に行こうかって」

「あら、デート？ いいですね」

この老夫婦からの突然の質問に応えるのに、僕は迷った。彼女と一緒に遊びに行こうとしているが、他人からこのように質問をされることは想定していなかった。吉田さんとは同級生どうしであり、「デートですか？」と訊かれて、僕はなんと返事をすればよいのだろう。いったい、彼女は僕のことをどう思っているのだろう。

彼女を横にして「はい」と答えたら、「違います」って即、否定されるんじゃないだろうか。でも、「いえ、ただの友達です」と言うのも失礼のように思うし、もしも彼女が僕に好意を持っていたら、それこそがっかりさせるだろうし、機嫌も損ねそうだ。

たった一言「デート？」と訊かれただけで、僕の頭の中で「はい」と「いいえ」が行ったり来たりしている。いったい

どれくらい時間が経ったのだろう、気づくと隣で業を煮やしたのか、彼女が「ええ、まだつきあってから少ししか経ってないんですけどね」と僕より先に答えを返した。

彼女に答えさせるとは……、一番最悪の結果になってしまったことを悟った。

僕が落ち込んでいる傍らで彼女は老夫婦と話を続けている。列車についての話題だった。

「私たちが小さいときは車もそんなになかったから、列車に乗るのがあたりまえだったけど、こんな風に列車でのんびり旅行に行くのがいちばん良いのかもしれないね。最近では自動車もどんどん自分勝手な人が増えて、なんて言っちゃった、

……あ、あおり運転。あれとか典型的な例でしょ」

落ち込んでばかりもいられず、僕も話に加わる。

「そうですね。最近はドライブレコーダーが普及したから明らかに変わったけど、昔から乱暴な運転はいっぱいあったんでしょうね。でも、ほんととはぼくたちも車で行く予定だったんです。うちの父親から列車に乗ってほしいって言われて変えたんです」

「あつ、そうだったの。それは大変でしたね」

「でも、今日は列車に乗って正解でした」

吉田さんが神妙な顔つきで話をする。

「さっきのあおり運転の話ですけど、私は車の運転、あまり好きじゃないんです。スピードとかあまり出せないんですけど、ほら、こっちの高速道路は片側一車線の区間が多いので、後ろに渋滞がずっと出来ちゃって。追い抜き区間がはやく来ないかな来ないかなって、ドキドキしながら運転しているんです」

「へえ、意外だね」吉田さんが悩んでいることについては同情をするが、その時の僕はしっかりした彼女の弱い一面が見れたようで少し嬉しかった。

「でも、いいわね。若い人たちは。ふたりでいればどんなことでも楽しいでしょ。そうだ。私たちの食堂は足毛駅のすぐ真向いなんですけど、足毛まで来ることがあったら、ぜひお二人で寄ってくださいね」と言ってお店のチラシを渡してくれた。

チラシには木造の古いお店の外観が写っており、チラシの下の方に「春待食堂」と書かれている。

「これ、はるまち食堂って読むのですか？」

「ええ」

「なにか素敵な名前ですね。雪国に暮らす自分たちには春は特別ですもんね」

「そう言って頂けると嬉しいですけど、私と主人とふたりでやってる小さな食堂でしかないんですよ。私の親がやっていたときは足毛もニシン漁でにぎわっていたので、建物だけは大きいんですね」

「私、足毛に遊びに行くときは必ず食べにいきます。ねっ！」
話の流れだったとは思ったが、吉田さんが僕を誘ってくれたことが嬉しかった。

「ありがとう、待ってるわね」

「ああ、今日はいいいお話ができました。やっぱり鉄道はいいわよね。お父さん」

「ああ、列車の旅は最高さ。俺は前からこういう列車に乗りたかったんだ」

「僕たちも、おふたりとお話ができて楽しかったです」

「春待食堂…」僕はもう一度チラシを眺めながら読み返した。
北海道の春は冬が厳しいゆえに、北海道の人間にとって特別

な季節である。東京で暮らしている時は、コンクリートジャングルの狂った猛暑、そして夏とは対照的に中途半端な灰色の空をした冬が嫌いだった。確かに北海道の冬はたくさん雪が降り、生活は大変であることは間違いないが、その冬を不思議と嫌いに思ったことはなかった。

その時、列車がトンネルに入ったのか車内が突然暗くなり、チラシの文字が読めなくなる。天井の電灯も消えて真っ暗になってしまったことを不思議に思ったが、車両のあちこちからは「ひゃっ」とか「怖い」とかの声が聞こえた。暗闇はしばらく続いた。僕は闇の中で横に座る吉田さんの身体が震えているのを肌で感じた。

「大丈夫？」僕は吉田さんに声をかけた。

「うん。だいじょうぶよ。でも、ホント真っ暗だね」

しばらくするとトンネルを抜けて車内が一瞬に明るくなる。

吉田さんは掴んでいた僕の腕を慌てて離れた。

「あれっ？ ふたりは？」お向かいの夫妻がいないことに同時に気づいた。

「えっ、どうして？ 席、離れた？」

「あんなに真っ暗だったのに？ 動けないでしょ？ 何も見

えないから」

暗くなった時間は感覚的に二十秒ほどだったと思うが、二人の姿は車両のどこにもなかった。このような状況を「きつねにつままれる」と言うのだろうか。お向かいの夫婦がなんの形跡もなく消えてしまったのだ。

列車は次の秩母別駅に止まった。ドヤドヤと新たな乗客が入ってくる。この駅でもかなりの人数だ。

「ここ、座っていいですか？」と聞かれたので僕は返答に困った。ご夫婦が戻ってくるかもしれないと思ったからだ。

「あ、いや。いえ、大丈夫です」

座って良いのか、悪いのか判らないような返事になってしまった。僕の返事が気になったのだろう。その男性は僕に「なにかあったんですか？」と僕に再び聞いた。少しだけ迷ったが嘘をついても、よけいに不安にさせると思い、暗闇の中でふたりがいなくなったことを正直に話した。

「へえ、さっきまでご夫婦が座ってたんですか？」

「ええ、足毛から列車で札幌へ行くっておっしゃってたんですけど、さっきのトンネルの中で暗くなって、……で抜けたら二人ともいなくなってたんです」

「トンネル？ 沼太から深河までは、確かトンネルはなかったはずですけどね」

その言葉で自分の馬鹿さ加減に気づいた。確かにそうだ。高校時代ずっと列車通学していたのに。すっかり当時のことを忘れていた。このあたりは平野でもありトンネルなんてあるはずがなかった。

さらに気付いた。沼太駅から秩母別までの時間はたった五分くらいだ。でも、僕らは二人と色々な話をし、おにぎりまでごちそうになって……、あんなにたくさん話をしたのに……。何がどうなっているのかさっぱり判らない。

「あのご夫婦はいったい？ 車内も確かに真っ暗になって……」

「さっき、そのおふたりは足毛から列車に乗って来たって言われました？ でも、足毛から瑠萌まではもう廃線になってますよ」

僕の手には春待食堂のチラシだけが残っていた。

・第三話 動物園でデートしよう

深河駅で降りて、朝日川行きの特急ルピナスに乗り換える。ここでも久しぶりに乗ったルピナス号の車両が十両もあることに驚かされる。

「私、よく考えたら乗車券しかもってないけど、これ特急だから特急券もいるんじゃないの？」

沼太駅で買った切符を見ながら吉田さんが僕に尋ねる。

「あ、それね、特急券は要らなくなったって親父が言ってた。自由席だったら、この定期だけで乗れるって。特急券はなくて、どうしても座りたい人が指定席の指定券を別に買えばいいんだって」

「へえ、そうなの。じゃ、指定席券は買っていないから、自由席で行くの？」

「うん。朝日川までなら二〇分くらいだから、それでいいよね？」

「うん、それは別に構わないけど……、ほんと鉄道も変わったのね」

自由席の車両が半分の五両つないであるみたいだったが、

その中にロングシートの車両を見つけた。

「ここでもいいんじゃない？」

「そうか。自由席は定期だけで乗れるからたくさん乗れるようにしてあるんだ。なんか快速電車みたいだね」

「そうね。確かに列車乗り放題にしたら、混雑する時もあるだろうから自由席には出来るだけたくさん乗れるようにしたんでしょね」

「二〇分くらいだったら立ってても大丈夫だよ」

「うん。私も安いほうがいい」

僕たちは吊り革に掴まりながら立ち話をしている。すでにシートは全て埋まっていて、二十人ほどの人が僕たちと同じように立っている。車内をぐるっと見回すと、知った顔を見つけた。

「あっ、知り合いがいる。ちょっと一緒に来てもらっていい？」

深河高時代の同じサッカー部だった大吾だ。大学時代も帰省した時には時々会ったりしている友人で、彼は高校を出てからすぐに朝日川の市役所で働き始めた。社会人としては先輩だ。

「大吾、ひさしぶり」

「おっ、久しぶり」

「ひとり？」

「いや、彼女と一緒にんだけど列車が珍しいみたいで、全部の車両を見てくるって言って……、」

言い終わる前に、大吾が吉田さんに気づいた。

「お、お前もデートか？」

「ああ、デートだ」

今度は返事で失敗する訳にはいけないと思い、吉田さんにはつきり聞こえるように堂々と言い切った、…のは良いがあまりにも張り切りすぎて声が裏返ってしまった。吉田さんは、さっきの僕の答えとあまりに違ったのがおかしかったのだろう。隣で「ぷっ」と吹きだした。

「吉田あかりです。よろしく」

「赤井の高校のときの同級生の増山大吾です。で、おまえら、どこに行くの」

「動物園に行こうって。彼女も大学が札幌だったんでお互い久しぶりなんだ」

「俺たちも動物園は先週行ったぜ。あつ、そうだ。俺たち、

朝日川駅からの周回バス使ったんだけど、今は最寄り駅の北曙駅からレンタサイクルがあるみたいだぜ。俺たちは動物園に着いてから知ったんだけど」

「へえ」

「おまえ達、鉄道の会員パス持ってるか？ 会員だったら北曙まで乗った方がいいかもよ。朝日川駅からのバスはひとがいっぱいだったから座れないかもしれない」

「そうなんだ。俺たちバスで行くようにしてたんだけど……」

「ま、どっちにしろ会員パス持ってたなら今から得することが多くなるよ。今、朝日川市も鉄道駅からのバス路線を増やすようにバス会社と交渉しているぜ。鉄道だけ変わってもあとに続くバスがないといけないからな。市が補助金をつけるように動いているんだ」

その話を聞いて、高校を卒業して先に就職した大吾が立派に市役所で働いているように思えて少し尊敬した。

「ありがとう、大吾。試しに北曙駅からレンタサイクルに乗ってみるよ」

「それにしても、お前んとこのお父さんすっぱーよな？」

「えっ？ うちの親父？」

大吾が話題を僕の親父に切り替えた。吉田さんのお母さんが駅で言っていたことが思い出された。

「お前の親父さんだろ？ 瑠萌線の存続をHRに訴えたっていうのは」

「どういうこと？ さっきも彼女のお母さんに同じことを言われて……、俺、全く何も知らないんだけど？」

「お前、親父さんが何をしたのか知らないのか？」

「うん。えっ、いつ頃の話？」

「去年の……、うん。正確な月までは覚えてないけど春頃だったよ」

「去年の春……、俺まだその頃は東京だった。確か、旅行に行ったり、バイトしたりしてたから、こっち帰ってこなかったな」

「お前、前にお父さんが役場で働いてるって言ってたろ？ 俺、そのこと覚えてて沼太町の石井さんって人が瑠萌線の存続協議会で大演説したって聞いて、たぶんお前の親父さんだろうって思ってたんだ」

「あっ、うん。言ったことあったな。でも大演説って？」

「俺も役場の中で人づてに聞いた話ではあるけど、お前のお

やじさんがHRとの交渉で、会議室のドアを開けてどなりこんだって話だぜ」

「やっぱり？ やっぱり怒鳴りこんだんだ？」

「だから瑠萌線の廃線問題、会議の前までは深河から瑠萌までを存続したいなら、資金援助をしてくれてHRは言ってたんだ。お前のおやじさんたちは、沿線の人たちと協議会作って反対してたんだ」

「うん。なんかそういう話は漠然とは聞いたことはあったけど……」

「で、その会議に北海道知事の……」

その時、「ねっ、大ちゃんすごいよ！ この列車十両もあるよ」

大吾の彼女が帰ってくるなり、はしやぎながら話を始めた。

「茜ちゃん、……全部の車両を見てきたの？」

「うん、グリーン車もあったけど、すごい良いシートだったよ。三列しか座席がないの」

「そりゃすごいね。で、茜ちゃん、今俺昔の友達と話してるんで、ちょっと待って……」

「でさ、ちょうど良く座席がふたつ空いてるのよ。今だった

「はまだ座れるから、行こうよ！」

「茜ちゃん、でも俺、今……」

さっきの凛々しい大吾が彼女の前では、別人のようだ。

「ごめんなさいね。また、いつかお話ししよう！」

大吾の彼女は僕と大吾の会話を勝手に終わらせる。

「おい、大吾！ 怒鳴りこんだってば……しを」

「ごめん、また今度な」

大吾は彼女に腕をがっちりつかまれて連行されていった。

またもや親父が会議室に怒鳴りこんだ話は途中となり、よけいにその会議のことが気になって仕方がなくなった。

僕たちは朝日山動物園の最寄り駅である北曙（あけぼの）

駅で初めて列車を降りてみた。

念のために朝日川駅では、改札からいったん出てバス乗りの状況を確認した。大吾が言ってたとおりで、改札を抜けた瞬間から人が今まで以上に多く、なにかのお祭りがあつていようだった。バス乗り場にも長い行列が出来ていて、乗れるまでにはかなり時間がかかりそうだ。しかも、立たないといけない。乗ることはあきらめて再び改札から中に戻った。

会員バスだと改札での出入りが自由に出来るのが助かる。

「いいな。私もその会員バス欲しいな」

吉田さんはここまで、このセリフをすでに五回はつぶやいている。

「初めてこの駅で降りたね」

北曙駅は朝日山動物園の最寄り駅ではあったが、まともな駅舎もなく、誰もが利用していない駅だった。そのため、動物園に行くときはほとんどの人が朝日川駅からバスを利用していた。

ホームから階段を伝って外に出る時になにやら大きな白い半円形のパネルがホームに設置してあることに気付く。ホーム側からは気付かなかったが、階段を降りて後ろを振り返るとそこには嬉しい驚きがあった。

「きゃー、かわいい。何、この駅、シロクマの顔になってる」

そう。僕たちは知らなかったが、この駅舎は外から見ると大きなシロクマの顔のようになっていて、くぐった穴はシロクマの口の部分になっていたのだ。

多くの人がシロクマの前で写真を撮っている。

「ええ？ 昔は何もないしよばい駅舎だったけど、いつの間

にこんな作ったんだ？」

「でも、かわいい。早く写真撮ろう！」

僕たちもシロクマの前で二人が写るように自撮りで撮ってみる。

「これインスタ向きだね」

「動物園への出発点には最高だね」

レンタサイクルの貸出所も併設されていた。動物園は歩いて三十分くらいの距離なので自転車がぴったりだ。走り始めると季節的に風がすごく気持ちいい。こんな風は東京では感じることはなかった。

「サイクリングもたまにはいいね！」

僕と吉田さんは北海道特有のまっすぐなそして平坦な道を、お互いを抜いたり抜かれたりしながら走る。道沿いの電柱には色とりどりの旗が取り付けてあり、動物のシルエットと名前が描かれている。これも動物園にいる動物を紹介するために新しく設置されたのだろう。いくつかの旗には、動物に関するクイズが書かれているのにも気付く。

色々な旗を確認しながら走ったこともあり、退屈もせずあつという間に朝日山動物園に到着した。レンタルサイクルを

停めようと専用の駐輪場に向かう。

駐輪場の入口には、またもやシロクマの顔のゲートがあり、『自転車を使ってくれてありがとう。ぼくたちの住処の北極の氷がとけないようにエコな交通機関を使ってくれてありがとう』と書かれたメッセージが書かれている。

「こういうのを見ると、列車で来て良かったって思うね」

「プラスチックもだけど、ほんと二酸化炭素の排出もまじめに考えないとやばそうだよね」

「どうする？ 動物園のパスポートは買う？」吉田さんに尋ねる。

「そうね。久しぶりだけど、今からまた何回も来たいから買うおうよ」

動物園の入場料は千円だが、年間パスポートの価格は千五百円である。このパスポートで年間を通して何回も入場できる。吉田さんは即答してくれたが、誰と一緒に来たいと考えたのだろう。尋ねてみたいが今一つの勇気がない。

彼女は楽しそうに話を続ける。

「なんだ。よく考えたら列車もおなじように早くから年間パスにすれば良かったのじゃない？」同じことを僕も考えてい

た。

「そうだよね。こんな大きな施設はお客さんがいなくても、たくさん入っても人件費は対して変わらないんだろうから。列車も空でも満員でも運転士と車掌で走らせることが出来るんだからね。誰がこれに気付いたんだろう？」

「本当に親父が、考えたのかな？」

吉田さんと話しをしながら、動物園を歩く。今までに経験したことがないくらい大勢の人で賑わっている。

「デイズニールランドもだったけど、やっぱり人が多い方が楽しいよね」

人の多さに東京で友人たちと遊びに行ったデイズニールランドのことを思いだしていた。動物園ではシロクマのぼくばくタイム、ペンギンの散歩、ガラスばりのトンネルなど。動物の生態をそのまま見せる『常態展示』で全国的に有名になった。この日、人気施設では長い行列に並ばないといけなかったが、彼女とお互いの大学時代のことを楽しく話していると時間も短く感じた。

「あー、楽しい。」

僕は吉田さんが喜ぶ姿を横に見ながら歩く。偶然であった

がお互いの手が触れる。その指を勇気を出して握ってみる。彼女は……彼女も僕の手を握り返してくる。

これから僕は吉田さんと一緒に何度この動物園に来るだろう。いや、もっと色々な場所に一緒に遊びに行くのだろう。際限なく広がる楽しい北海道の生活を予感していた。

*

「デートはどうだったの？」

家に帰ったとたん、母からの質問攻めにあった。「昼ごはんは何を食べた？」「どんなことを話した？」「優柔不断な態度で彼女を怒らせなかったか？」「次はいつ会うことにしたの？」とか、高校まで彼女のいなかった僕を心配して何かと質問を受けた。僕は不思議に親心を理解していて、ひととおりの報告を母親にしてあげた。一応、手を握ったことは隠してはいたが。

「列車で出かけて結果オーライだったかも。色々列車の話題もできたしね」

「そうなの？ 私もお父さんからもらった定期で今度札幌

まで遊びに行こうってしてるんだけど、なんか楽しそうね」

「列車にみんな乗ってるから、昔の友達や会社の先輩にも会ったよ。ま、不思議なこともあったけどね」

「不思議なこと？」

「うん。深河までは向かい合わせの席に座ったんだけど、向かいあわせになった年配の夫婦と話しながらいったんだ。その人たちから、おにぎりとかもらって食べたりしてね」

「へえ、なんか昔の列車みたいね」

「でも、途中列車の中が真っ暗になってね。トンネルは無いから暗くなるはずはないんだけど、間違いなく真っ暗になって、その暗闇の中でふたりが消えちゃったんだ」

「消えたって？」

「うん、列車が止まって降りたとかじゃなくて、明るくなつたときには居なくなってるね。しかも、その人たちは足毛から列車に乗って来たって言ってたんだよ。もう、廃線になってるのにな。でも、足毛駅前にある食堂、……なんて言ったっけ？ あ、確か食堂のチラシをもらったんだ。これ、いつか食べに来てねって」

僕は母親にチラシを見せた。

「はる……まち、はるまち食堂って読むの？」

「うん、そう言ってた。お母さん、知ってる？」

その時、僕たちの話が聞こえたのか？ 「はるまち食堂？」

それまで、ずっとそばで新聞を読みながら話を聞いていた親父が急に話に入ってくる。真剣な表情をしてチラシを僕の手から奪うと「……これ、春待食堂のチラシ。これは、どんな人がくれたんだ？」と真剣な顔で尋ねる。

「えっ？ どんなつて？ 列車でたまたま一緒に座ったご夫婦だよ。もう七十過ぎくらいの……」

「まさか？」親父は何かを思い出そうとしているように見える。

「なあ、おやじ。列車の中でおやじが瑠萌線の存続協議会にいきなり怒鳴りこんだって話を色々な人から聞いたんだけど、おやじはいったい何をしたの？」

「ああ、いや……。俺は特になにも……」

親父は僕の質問には答えず、心ここにあらずといったような感じのまま、チラシをずっと神妙な面持ちで見つめていただけだった。

・第四話 存続協議会 その一

「以前はここらへんにも鉄道が走ってたんですよ」

吉田さんが車の後部座席からため息まじりの声を漏らす。

「そうだね。瑠萌線は昔は足毛まであったんだよ。当時はニシン漁でにぎわっていたこともあるけどね」

親父はハンドルを左右にゆくりきりながら答える。親父は元々瑠萌市の出身で、幼少時代には、この海岸線に沿った区間をよく列車に乗っていたと聞いたことがある。僕も助手席に座り、線路が残されたままになっている道路の左側にずっと見えている線路敷をずっと追っかけている。

僕たち三人は瑠萌駅周辺で借りたレンタカーで足毛町に向かっていた。僕と吉田さんが朝日川に出かけてから一週間ほどが経った頃、親父から足毛まで一緒に行かないかと誘われたのである。沼太から直接車で行くことも考えたが、親父と僕が会員パスを持っていることと、最近になってレンタカーの料金が値下げされたこともあり、途中の瑠萌までは列車で来たのである。

道の右側には真っ青な空、それを映し出すように真っ青な

海が広がっている。夏は北海道のベストシーズンであることは間違いない。このあたりの海岸は海水浴場になっているため、家族連れの手車もけっこう多い。

「今度は海も行ってみたいね」

「えっ、海？」

後方からの声だったので聞こえにくかったが、吉田さんは確かに「海に行きたい」と言った。一瞬、海水浴のことと想像したが、もしかしたら他の目的かもしれない。

せっかく海に行きたいと人に言うなら、もう少し具体的に言ってもらいたいと思う。

「そうだね。今度は海に行こうか。で、泳ぐの？」

頭の中で考えすぎて、また間抜けな質問をしてしまう。自分でも分かっているが、考えすぎるのが悪いくせだ。

「えっ、この季節に海に行こうって言ったら、普通泳ぎに行くんじゃないの？」

「あ、そう？」

「あ、そうって、…私の水着が見れるかどうか気になったんですよ。いやらしい」

「いや、いや。海に行くっていろいろ目的はあるから、泳ぎ

に行きたいなら初めからそう言うてよ」

「もう、相愛わらずはつきりしないわね。男ならもつと正直になりなさいよ」

「ははは、あかりさん、圭介を許してやってください。こいつは、子供の頃はほんと恥ずかしがり屋で女の子の友達がいなかったんだ。今、あなたと一緒にドライブしてるってのが、親としては奇跡だと思ってるんですよ」

場を和ませようとして助け船を出してくれたのかもしれないが、僕は余計に恥ずかしくなった。

「ところで、あかりさんはどうして地元に戻ってきたの？少し前に役場内で沼太土木はお兄さんが継ぐことになったって話を聞いたこともあるけど」

「あ、はい。それは本当です。でも、うちは土木関係の工事だけじゃなくて、鉄道の軌道工事も下請けでやっているんです。兄は道路工事が主ですけど、私は将来、鉄道の仕事をしたいと言ったんです。私も大学で都市工学、昔の土木工学の専攻だったんですけど、やはり環境問題とかが気になって、鉄道をもっと良くしないといけないって思ったんです」

「へえ、女性で鉄道の工事っていうのも珍しいね」

「吉田さん、駅とか造るの？」

「そうね、あとは線路の保守工事とかやってるわよ。鉄道の工事は専門の資格があるの」

「でも、吉田さん、それだけ鉄道がやりたいって言うけど、この前動物園に列車で行こうって言ったとき、反対したよね。なんかおかしくない。あの時、俺はすごく気を遣って話をしたんだよ」

「ああ、あの時？そうね。なぜかしらね？私は前に言ったように車の運転はあまり好きじゃないけど、列車賃にお金使うくらいなら美味しいものを食べた方が良かったって思ったのかな？結果はオーライだったけど」

「なんか納得いかないけど……」

「いいじゃない？あの時、新しい鉄道のことが知れて良かったわ。やっぱり列車にはお客さんがいっぱい乗っている方が良くってうれしくなったのよ。少しはH/Rも今からは儲かるようになるんじゃないの？」

「そうだと良いけどね。北海道のローカル線は今まで廃線の危機を迎えていたんだからね。鉄道工事の仕事をあかりさんみたいな女性が目指すってことも驚くけど、いろんな意味で

「鉄道が変わろうとしてるんだらうね」

「でも、線路の仕事は大変じゃないの？」

「あ、はい。まだ自信もないんですけど……」

「冬はやっぱり除雪作業とかするの？」

「そうね。雪だけは無くならないでしょうからね」

「確かに保線の仕事は大変だと思うけど、あかりさんが圭介と話すのを聞いてても、しっかりしているから大丈夫だって感じますよ」

「ありがとうございます」

「鉄道会社の経営が良くなれば、色々な保線機械も増えて少しは改善されると思うけどね」

「いつ頃から、鉄道の仕事を目指そうと思ったの？」

「そうね、私、……中学生の時、家族でここをトロッコ列車に乗ったことがあって……なんかその思い出もあって、その頃から漠然と鉄道関係の仕事が出来ないかって思ってたんです。その頃は線路の仕事ではなかったんですけどね」

「そうなんだね。確かに瑠萌から足毛までルモッコ号が走ってたよね。うちもまだ圭介が小さいころ乗せたことあるけど、圭介覚えてるか？」

「あ、うん。覚えてる。まだ幼稚園の頃だったけど、楽しかったの覚えてるよ」

「僕も子供の頃に、親父が北海道内の色々なところに列車で連れて行ってくれた楽しい思い出がたくさんある。」

「なあ、親父？」

「なんだ？」

「この前は神妙な顔をして答えてくれなかったけど、朝日川に行ったときや、その後も会社の人や、沼太町のもいろんな人から親父の話を聞いたんだ。おやじがHR相手に大演説をしたって。なんか色々なひとから聞いたんで情報が混乱しちゃってるんだけど……、親父がHRの社長に物申したとか、鈴井知事を怒鳴りつけたとか、号泣してお願いをしたとか、人によって話がバラバラで訳が分からないんだけど、正しい話を教えてくれないかな？」

「えっ、俺は鈴井知事を怒鳴りつけたってなってるのか？」
「いや、そうは思っていないけど……、少なくとも鉄道についての提案は親父が考えたことではあるんじゃないの？」

「そうか確かに、おまえにもきちんと話しておかないといけないな。いつかは話そうと思ってたんだ。だから、君たちに

一緒に行こうって誘ったんだ」

「えっ？ 急に足毛までドライブに行こうって言ったのは、なにか関係があるの？」

「ああ、……俺じゃないんだ。俺は、何もな。ただ、……」
既に廃線となった線路を左手にずっと見ながら親父はその日のことを話し始めた。

*

会議は沼太町役場で行われた。すでに五月だというのに、三月末に降った大雪の影響で役場の敷地には、まだ残雪が残っている。

役場の会議室には瑠萌線沿線の首長と北海道鉄道の幹部が一同に会した。ただし、今回の会議では瑠萌市長が前回の会議を最後に協議会から抜けたために沿線自治体の席がひとつ減り結束が弱くなったように見える。

まず、主催者である北海道鉄道からのあいさつ。担当者から瑠萌線の廃止を決めた経緯、現在の路線の収支状況そして沿線自治体との協議経緯が手短かに説明される。

そこまで終わった時点で、北海道鉄道の担当役員から改めてあいさつがなされた。

「我が社としても一九一〇年(明治四十三年)の開業から、一世紀以上の間、沿線の皆様に愛されてきた瑠萌線を廃止することは、誠に断腸の思いでございます。しかし、自動車および道路網発展に伴う鉄道利用者の減少により既に瑠萌線の収支は会社単独の経営努力では手に負えない状況になっており、鉄道だけではなく他の交通媒体を含めて検討を行う時期を迎えたと考えています。なお、沿線自治体の住民の方の鉄道を残したいという気持ちも理解できますので、鉄道を残すことも除外はしていません」

言葉は丁寧であるが、内容に関しては以前からの方針ならなり変りもなく、要は瑠萌線の全線を廃止し、バスに切り替えたいという意図が読める。仮に沿線自治体があくまでも鉄路にこだわるのであれば相当の出資をしなければならぬ。出席している首長たちのため息が会場に漏れた。

この時点で役員は席に戻り、再び担当者からの話となった。今日の主題である鉄道路線の存続に必要な各自自治体からの費用負担受諾の回答である。

「鉄道の存続を自治体の皆さんが要望されたことに對して、前回の協議会では自治体からの費用負担額について提示をさせて頂きました。弊社としまして、鉄道の存続についてこのような形を取らざるを得なかったことを申し訳なく思っています。ですが、この件につきましては、いつまでも結果を先伸ばしすると、以降の条件をさらに悪化させるかもしれませんし、沿線自治体で取られる対応策にも影響を与えかねないと思います。弊社といたしましては前回の協議会でその費用負担について、今回の会議で回答くださるようお願いしております」

担当者も言葉を選びながら進行しているのが明らかであった。

「今から回答について確認させて頂きたいと思いますが、全…すべての自治体からの回答を頂けない場合は鉄道による瑠萌線を廃止させていただき、バス路線設定に関する協議を引き続き行つて参りたいと思います。バス路線設定の素案については後ほど提示したいと思います」

言葉とは裏腹に冷たく感じるその言葉、そして既にバス路線への転換の検討がなされていることに、出席している沿線

自治体の市長および町長からどよめく声が上がった。

「では、今回の費用負担について、ご賛同いただける市町村は挙手をお願いいたします」

みな、お互いに顔を見合わせた。いったんことが決まると路線を維持するためには費用負担を今後ずっと続けていかなければならない。町の財政も厳しい状況にある。しかも現状で鉄道を利用している住民の利用はごく少数であり、鉄道を利用していない住民はすでに廃線は止む無しとあきらめている状況だ。

沼太町長の横田はずっと沼太町で働いてきた。三年前に他の職員の勧めで町長に立候補し初めての選挙で当選を果たした。四十年近く役場で働いてきたこともあり、沼太町の住民のほとんどが、もはや鉄道を必要としないことを把握していた。

しかし、深河市にある高校まで通う学生は少なくなく、また今後運転免許証を返納していくだろう高齢者のことを考えれば、やはり鉄道を廃線してしまうことが町の将来に遺憾を残してしまうかもしれない。とは言え、鉄道に未練があつ

ても町の貴重な予算を鉄道会社に寄付をして良いという合意はどの自治体もとれていなかった。

会社側も自治体の予算的な事情をある程度把握していた。そのため、市または町が予算を鉄道存続のために提供できるかについては期待もしていなかった。そして、予想通りに列席する首長の誰一人として、その手が上がることはなかった。「皆様のご意志を確認させて頂きました。我々も瑠萌線を守りきらずに申し訳ありません。不本意ではありますが、瑠萌線については……」

裁判官が判決を告げるように、担当者がその言葉を発しようとした、まさにその時であった。会議室の両開きのドアが勢いよく開かれ、作業着姿の男が部屋に入るなり、各長が並ぶ机の方を向いて叫んだ。

「みなさん、少し待ってください！」

いつもの穏やかな表情は想像もできないほど必死の形相をした雄二であった。

*

「えっ、おやじが会議に怒鳴りこんだって本当だったの？」
多くの人が聞いてはいたが、おとなしい親父がそのような大胆な行動を取ったことが信じられなかった。本人の口から聞いても、まだピンとこない。

「怒鳴りこんだって誰から聞いた？」

「いや、誰って……」

吉田さんがすまなさそうに小声で親父に伝える。

「すいません。それ、私のお母さんが石井君にそう話したんです。お父さんが会議場に血相をかえて怒鳴りこんだって」「怒鳴りこんだんじゃなく、会議がすでに始まっていたから途中でドアを開けるしかなかったんだよ。確かに、ちょっと焦ってたから勢いよくドアを開けてしまったのは少しずいかなかったとは思ったけどな」

親父はその時のことを思い出しているのか、妙に照れている。

「で、どうなったの？」

僕と吉田さんは、親父の話聞き漏らすまいとさらに耳を傾ける。

「はいはい、急かさなくても話しますよ。全部ね」

・第五話 存続協議会 その二

「おいっ！」

いきなり会場に現れた雄二に対し、出席者から憤慨した声があがる。

「なんだお前は？ 会議の途中だぞ」

「早く会議室から出ないか」

激しい罵声であったが、雄二はさして慌てる素振りも見せず言葉を続けた。

「すいません。町長、今戻りました」

その言葉を待ち望んでいたように、出席者の中から大きな声が出る。

「あつ、そうだった。そうだった。みなさん、すいません。私のせいです」

声をあげたのは横田である。独特の身振り手振りをして、いかにも忘れていたような仕草で会場の注目を浴びる。横田のおおげさな、わざとらしいその言葉に雰囲気はさらに悪くなる。しかし、横田も言葉とは真反対の落ち着いた態度で言葉を続けた。

「みなさん、彼はまぎれもない沼太町の職員です。私が会議のメンバーに申請するのをすっかり忘れておりました。そして彼が開始に間に合わなかったのも、私の命によるものなのでどうか彼の参加をお許しください」

「横田町長、いったいどういうことですか？」 鉄道側から質問があがる。

「あ、はい。今から説明しますが、彼は私からの指示であるお方を連れてきてもらうようにお願いしたのです。もしも、その方が来なければ彼も協議会には出ないことになっていました」

「その方っていったい誰なんですか？」

「石井課長、その方はお連れ出来たのですか？」

横田は雄二の顔を確認するように尋ねた。

「はい、町長」

雄二は作業着のポケットから携帯電話を取り出し指示を出す。

「榊田くん？ 今からお連れしてください。はい、すぐで構いません」

どこか近くの部屋にでも待機していたのだろう。ドアがノ

ツクされるとすぐに二名が現れる。

「お連れしました」

「えっ？」

先ほどのどよめきとは少し異なる声が再び会場に起こる。会議室に入ってきたのは出席者が良く知る瑠萌市長の大西であった。

「大西さん、あなたは前回の会議で協議会から抜けたはずじやなかったですか？」

北海道鉄道の幹部からきつい口調で質問があがる。大西は会議室にコの字型に並ぶ机に座る出席者の顔をひとりひとり確認する。緊張からか少しだけ身体が震えている。

「瑠萌市の大西です。私は前回の会議で石狩沼太から瑠萌までの区間の鉄道廃止およびバス路線への転換を承認し、今回から協議会を抜けさせてもらうことでみなさんの了解を得ました」

「で、今日はどういうことですか？」

北海道鉄道の社員からはさらに冷たい言葉が続く。

「はい、私はこれまでの協議会において瑠萌市管内の乗降客の人数の改善を提示されていましたが、鉄道が存続できるそ

の人数を市民に提示し協力を求めてはいましたが、結局、条件となる鉄道利用者を確保することは出来ませんでした。瑠萌市民で鉄道を利用したいという人はごく一部に限られ、私はHRさんに回答ができないことで、これ以上協議会に参加する資格もないかと思いました」

そこまで話を終わると、大西は大きく深呼吸をして背筋を伸ばした。そして一呼吸したかと思うと再び話を始めた。

「でも、今日そこにいらつしやる沼太町の石井課長さんが訪ねて来られて、新しい鉄道を一緒に考えてもらいたいとおっしゃられて提案の内容を聞きました。その提案は決して全てが実現できるというわけではないと、ご本人もおっしゃってましたが、私にはそれまで出口が見えなかった瑠萌線、そして瑠萌市の未来に光が射した思いでした」

「彼は私に『我々は本当に鉄道を廃止する前に、出来ること全てのことを試してみたでしょうか？』と尋ねました。一度線路を廃線にしてしまえば、その復活は二度とあり得ない。だから、鉄道会社と沿線自治体で考えられること全てを試してみたい。そしてそのために瑠萌市にも、もう一度参加してもらいたいと訴えられました」

そこまで言う和大西は言葉に詰まった。下を向いて、しばらく沈黙をしていたが、光るものを振り払うと、今度は一転力強い言葉を続けた。

「私は北海道の鉄道、いや北海道全体の暮らしのために鉄道は必要になると考えなおしました。今、そして、瑠萌線を将来の子供たちに残せるかどうかを生きる私たちにかかっている。まだ、出来ることは必ずあります。一度抜けたことについては申し訳ありませんでした。でも、恥を忍んでもう一度参加させて頂きたい。どうか皆様の了解をお願いします」

大西は頭を深く下げるその姿に会議室の一同がもはや声を出せないでいた。

「私からも参加を認めていただくようお願いしたい」

横田が大西の参加を認めてもらえるように声を続ける。しかし、北海道鉄道側からは承認の答えはなかった。会議の進行は止まり、誰もがお互いに顔を見合わせてどのように進め続けなければならないのかを考えていた。

会議の主催者である北海道鉄道の役員が担当者呼び、なにやら小声で指示を行う。どうやら出席者で決を採るように

指示が出たようだ。

その時、会議室の隅に設置された電話が鳴った。会議に参加している職員が応答に出る。

「はい。大会議室ですけど……、あ、はい。そうです。はい、いらっしゃいますが……」

職員は小声で話していたが、いったん電話を保留して横田の傍らで耳打ちするように伝言を伝えた。

「何？ 道知事が？」

*

「えっ、なに？ 鈴井知事から電話してきたの？」

「そうなんだよ。昔だったら会議に参加するには、みんなが一同に集まらないといけなかったんだけど、ほら、少し前に感染症の問題でみんなが集まらない時があっただろう？ あの時は大変だったけど、その時にリモート会議だけはみんなに浸透して、離れた場所においても会議に容易に参加することが出来るようになっていたんだ」

「へえ、それで知事の方から電話があったんだ」

「ああ、それと鈴井知事は以前に手がけた鉄道の廃線について、何か後悔していたようにも思えたけどね。だから瑠萌線の廃止に関心があったんだろうと思ったよ」

*

横田の小さな声が聞こえたのだろう。会場が再びざわついた。誰もが電話をとる横田に注目する。

「はい、沼太町の横田です……、はい、今はまだ協議会の途中ですが……、ええ、それは可能ではありますが……はい、一応出席者には確認させてもらってよろしいですか？」

横田は受話器の口を手で押さえながら、参加者の方を振り向く。

「みなさん、今、鈴井知事からの電話が入りました。要件はこの会議にリモートで構わないので参加されたいとの申し出です。これから、リモートで話したいとのことなので準備します」

会場が今まで以上にざわめく。沼太町の職員が会議室に備え付けてある大型のモニターの準備を始める。まもなく道知

事である鈴井の顔が映った。

「鈴井です。すいません、突然の申し出となったことをお詫びします。今日は瑠萌線の存続協議会の最終回答の日だっと思いますが、私も瑠萌線の廃線についてはとても関心がありまして、自分自身が後悔しないように協議会に参加させて頂きたい思い連絡をさせて頂きました」

そこまで鈴井が話すと、横田が出席者に「みなさん、知事がこのようにおっしゃっていますが、参加の件よろしいでしょうか？」

モニターに鈴井が映っている状況では、出席者があからさまに拒絶をする訳にもいかない。そのことを狙っていたのかは分からないが、会場の空気を察知した鈴井はなかば強引に再び話を続ける。

「今はどのような状況でしょうかね？」

若い道知事の質問に二十歳以上年上の横田が答える。

「鈴井知事、協議会は、まだ途中で結論は出されていません。今は大西瑠萌市長が協議会への復帰を先ほど願ひ出たこともあり、今から市長の協議会への復帰について可否をとらうとしていたところです」

「えっ、大西市長ですか？ 大西市長が会議に戻られたのか？」

大西が焦りながらモニターに映る鈴井に言葉を返す。

「あの、私は沼太町からの新しい鉄道の提案を聞いて、もう一度、瑠萌線の存続に挑んでみたいと考えを改めました」

鈴井の表情がその言葉を聞いて変わる。そして会場の出席者に向かって言葉をかける。

「新しい鉄道の提案？ それはどのようなものでしょうか？ 私もぜひお聞きしたいと思いますが可能ですか？」

道知事の言葉に大西の協議会への復帰や鈴井自身の会議への参加を承認する過程は全て省略されて、話題が沼太町からの提案に集中する。誰もが反対意見を出せない状況となった会議室の空気を読み取った横田は、このタイミングで声をあげる。

「私からもみなさんをお願いしたいのですが、ぜひこの石井からの提案を聞いてあげてくれませんか？」

会場から特に反対の声はあがらない。沈黙は承認したものと取られるのが世の常である。

「知事、今回の協議会は、瑠萌線存続のために私たち沿線自

治体がどの程度の資金援助を北海道鉄道に対して出来るかという回答をする予定でした。ですが、我々としては鉄道に支援することについては、どこに自治体も住民の了解をとれていません」横田が丁寧に今までの流れを知事に説明しようとした。しかし、モニターの中で静かに話を聞いていた鈴井は冷徹ともとれるほど意外な一言を横田に伝える。

「いや、私は先ほど、沼太町からの提案が聞きたいと言いましたが……」

すでに鈴井の存在が会場の空気を支配している。これまでの経緯など興味がないと言っても言うようなその鈴井の気配に気づき、横田は話を先に進める。

「あ、はい。説明します。実は、私たちが瑠萌線存続のために作った『瑠萌線を残し隊』という活動グループがありまして、そのメンバーの中から出た新しいアイデアがあり、とてもワクワクする内容です。今までの鉄道とは全く新しい制度で鉄道経営の改善が出来ないかということを協議会にかけさせてもらいたいと思っていました」

雄二は鈴井と横田のやりとりを緊張していく。

「だから、それは、どのような提案なのですか？ 議論を先

に進めてください」

鈴井の苛立ちがさらに会場に伝わる。横田は会場、そして雄二の顔を見る。明らかな緊張が表情から一目瞭然で、おとなしい雄二がこれからの提案を上手に伝えることが出来るのか不安になる。

「あ、はい。石井から新しい鉄道の話をいたします。しかし、知事。この会議も始まってかなり時間が経ちますので、ここでいったん休憩を入れさせてもらいます。その間に石井には提案の準備を行わせていただきます」

横田が雄二のために出来る精一杯の援護射撃であった。その横田の言葉に鈴井は一瞬、眉間にしわを寄せたがすぐに穏やかな表情に戻り了解の意を示した。

協議会の場を鈴井に支配されそうになり、雄二に時間的な、そして心の余裕を与えたいと思った横田の必死の抵抗であった。沿線自治体と鉄道会社だけでなく、道知事までが参加することになった瑠萌線の存続協議会はこれまでで最大の山場を迎えた。

会議の参加者がタバコやトイレのために席を空けるなか、雄二は椅子に座り足元を見つめて、今からどのように話を切

り出すかを静かに考えていた。

・第六話 存続協議会 その三

足毛の町が近づいている。僕らはこの海岸付近にある稲荷神社に寄り道をした。この神社は映画のロケ地にもなったところがある。参道の途中に鉄道の線路が横切っていて参拝客はその線路を横切って渡る風景が印象的な神社だ。

しかし、今は廃線となり線路も撤去されたために、普通の参道に変わっていた。

「ここが見たかったの？」

「ああ、昔一度だけ来たことがあってな。線路が廃止になった跡は、どうなっているかと思ってたんでな」

親父はしみじみと昔を思い出しているようだった。僕はどうしたら、このようなつくりになるのかが分からなかったが、たぶん昔からある神社の参道に線路が敷かれ参道を横切ることになったのだろうと推測した。鉄道を敷くために、当時多くの人が用地を分断され、取られたと聞いたこともある。そこまでして敷いた線路をあつさり廃線することと聞いた地主の人はどのように感じたのだろう。

トイレ休憩をして、再び車を走らせる。僕は親父に運転の

交替を申し出たが、親父はそれを断りハンドルを握り続けた。あと十分もあれば到着しそうだ。僕と吉田さんは協議会の経緯を親父からずっと聞いているが、時間が足りなくなるのは心配になる。

「なにか鈴井知事って、テレビで見るのとイメージが違うんだけど。結構、上から来るの？」

「そうだな。俺も直接話したことなど無かったし、もっと若くて紳士的なイメージだったんだが、やはり若くして知事になるだけあって、ある意味で凄味がある人だったな。とにかく急に知事が参加することになったものだから、お父さんも緊張はしたんだけど、結果から言えば、好都合だったのかと思う」

「えっ、どういうこと？ 早く続きの話をしてよ」

「分かった、分かった。俺が話を始めたところからな……」

*

「では、改めて瑠萌線の存続協議会を再開させていただきま

す。今日はリモートですが鈴井知事にも参加して頂いて活発

な議論を交わしたいと思しますのでよろしくお願いします」

司会を務める横田が改めてあいさつを行った。瑠萌市長の大西にも自治体出席者の列に椅子が追加された。

「すいません。会議の冒頭で私から良いでしょうか？」鈴井から再度の申し入れ。

「はい、どうぞでしょうか？」横田が応答。

「みなさん、ご存じかと思いますが、私は知事になって二年も経ちませんが、知事になる前、夕波里市長として夕波里線の支線を廃止したことがあります」

皆、同知事の経歴は知っているので、驚きはしない。

「正直なところ、あの時の判断は正しかったのかどうかについて今でも不安になることがあります。鉄道が無くなったことで、不便になった方は多くはなかったと考えていますが、少なからずいらつしやったことは事実ですから」

鉄道を維持したいのか、廃止すべきなのか。この鈴井の発言の意図は理解できない。

「人口減少が始まった日本で、私がローカル線に下した方針が先例となって、この先もずっと続くことになりはしないかとも時々不安になります。鉄道をいったん廃止すればバスま

たは自家用車で移動するしかありません。道知事となり、少しだけ広い視野で考えて稀有することは、近年の異常気象のことであり、高齢化社会における移動手段のことです。この両方の視点から鉄道を残せないかと迷ったりしている心境です」

鈴井はまだ若い。ここまで聞いて会議の出席者は、若いからこそ今の判断が将来の北海道に大きな影響を与える気持ちの揺れを正直に告白しているのだと理解した。

「知事として力不足で申し訳ないと思いますが、みなさんには高齢化社会、環境問題、そして子供たち若い世代への継承という三つの観点で会議を進めてもらいたいと思います」
「素敵なあいさつをありがとうございます、知事」

鈴井の冒頭あいさつに対し横田は心の底から感謝を述べた。鈴井の心の揺れが会場全体の雰囲気より真剣な議論へと誘っている。

「では、石井課長から提案のほどよろしくお願いします」

「はい。改めまして沼太町産業創造課の石井でございます。今日は瑠萌線の存続協議会でこのような場で提案をさせて頂けることを光榮に思います」

多少の高揚感があったが、横田のおかげで自分が落ち着いていると感じることができた。

「我々は、鉄道については素人ですし、当然経営についてもしかすると見当違いのことを考えているだけかもしれない。しかし、昔から利用している鉄道が無くなることで一番困ることになるのは私たちですので、応援する意味でこちらから鉄道に対しての提案をさせて頂きたいと思います」

雄二はゆっくりとした口調でひとつひとつの段取りを確認しながら思いを口にしていく。

「我々は町内の様々な地区で懇話会を開催し、鉄道の存続そして廃線についての意見を聞いて来ました。そして、存続させるための切り口として、いったいどのような鉄道であれば乗るようになるかという点についても意見を交わしました。例えば沼太町から朝日川まで夫婦で買い物に行こうとなれば、鉄道で行くよりも車で行った方が「早いし、安い」ということで、わざわざ列車を利用したいという人はごく一部という結果でした。買い物には荷物が伴うので車の方が便利であるという意見も多かったです」

他の沿線の首長が複雑な表情を浮かべる。事実、住民の鉄

道に対する意見を述べる人はごく一部であり、ほとんどの住民はすでにあきらめたためか、元々鉄道に関心がないのか、無関心とさえ思える地区もあった。雄二の話す内容はどの自治体も同じ状況であった。

「確かに現状では、深河までの学生さんの通学を除けばほとんど利用者がいないというのが実状であり、瑠萌市の大西市長と同様で市民に対して鉄道を利用してもらいたい思いを様々な形で伝えてきたつもりですが、その成果はあがらず残念な気持ちでいっぱいです」

ここまでの内容はとづくに分かっていると言いたげな表情で鉄道会社の出席者は聞いている。

「でも、私たちは鉄道にいつまでも乗り続けたいという気持ちでいます」

「だから、その利用状況では会社として採算がとれないというのをずっと申し上げてきたつもりです」

発言が途中でたびたび遮られる。

「どうか聞いていただきたい。私たちは素人なりに何か鉄道に協力することはできないかと考えたのです。今からその提案についてみなさんと一緒に議論をさせて頂きたいと思っ

ています」

「議論って……、一方的に言われても……」

雄一はここまで自分が考えたように話を進めていた。そして、ここから提案の本題に踏み込む。

「すいません。議論については、こちらで考えた前提条件をひとつひとつ北海道鉄道の方そして知事に確認しながら進めたいのですが、よろしいでしょうか？」

「はい、わかりました。答えられる範囲でお答えします」鈴井が回答を返す。北海道鉄道からもしぶしぶ了解をもらう。

「まず、北海道鉄道さんにお尋ねしますが、鉄道の経営における費用の支出は固定費と変動費に区別されると思います。そして、鉄道事業の支出としては固定費が占める率が高いと考えているのですが、それで間違いないでしょうか？」

「ええ、鉄道の場合は線路や駅などの施設、そして車両のメンテナンスが必要で、その保守費に一定の費用が必要になります。あとはその保守要員や運転士などの人件費がかかりますので、固定費の割合は高いと言って良いと思います。」

「工場のような生産業とは違うということですね、……ということですね。現在と同程度かそれを上回る収入が確保

できれば鉄道会社の経営は可能ということでしょうか？」

「はい、数字上ではですね」

ここで雄二は、いったん視線を替えモニターに映る鈴井に話しかける。

「鈴井知事、すいません。北海道の人口は現在五百三十万人と考えていますが、合ってますでしょうか？」

「あ、はい。間違いないです。統計上は五百三十八万人で構いません」

「次に北海道鉄道さんにお尋ねしますが、現在の鉄道事業の収入、いわゆる純粋な切符の売り上げの額というのはいくらになるのでしょうか？」

「純収入ということでは考えるなら、現在は約八百億円程度かと思います」

「ここからがこちらの提案の内容になりますが、考え方が間違っている場合は指摘くださるようお願いいたします」

雄二の提案がさらに核心に近づいていく。

「今、世の中では音楽とか映画の配信サービスでサブスクリプションを採用している業界が増えています。いわゆるひと月いくらで聞き放題、見放題ってやつですね」

雄二はそこまで言うのと、一呼吸おいて提案の主題について言い放つ。

「そこで提案なのですが鉄道についても『会員制度による年間乗り放題』に出来ないかということをご提案申し上げます」「年間乗り放題」という、その大げさな言葉に会社関係者のみならず会議室全体がざわざわとする。

「乗り放題というのは『十八歳の青春切符』とかのことでしようか？」

「いえ、一日単位の乗り放題切符とかではなくて、年会費を支払うことで北海道鉄道の路線が一年中乗り放題という設定で考えてみたんですが……」

「そういうのものは考えたことはありませんので、実現は難しいように思いますが」

「何故です？」

「いや、列車の運賃というのは国鉄時代から制度として決まっていますし、現在設定している割安な特別切符も基本的にはその運賃制度を元に設定していますので……」

「今まで無かったから考えられないということですか？」

「ええ」

「すいません、勝手な考え方をして申し訳ないんですが、北海道鉄道さんの鉄道収入を八百億円としたときに、北海道の全人口五百三十万人で割ればひとりあたり約一万五千円くらいです。確かに利用できる対象年齢として考えるのであれば、幼少者や高齢者は会員対象から除かないといけません。そのため、感覚的で申し訳ありませんがとりあえず対象を全道の五分の一と想定し、百万人と考えます。この人口で収入を割り戻せばひとりあたりの会員費は年間で八万円強となります。ひと月あたりで考えれば六千五百円くらいです」

「ひと月、六千五百円で乗り放題にするということですか？ そんなバカげた話があるかつ……」

「ええ、北海道の路線全てに乗れるという設定です」

雄二はひるまずに話を強硬に進める。

「ええ、私もこの提案を考えている時は、自分は馬鹿なのかという気にも確かになりました。でも、逆に考えれば北海道の鉄道が現在それほどの利用しかされていないということにもなります。そして先ほど確認させていただいたように鉄道経営の支出において固定費の割合が高いということであれば、収入を切符の売り上げではなく、会員費として徴収す

れば良いのではないかというふうに考えたのです」

この発言で雄二の真意に気付いた各自治体の首長の表情が変わる。モニター越しの鈴井についても、それは同じであった。瑠萌市の大西だけは事前にこの提案の内容を聞いているので比較的落ち着いて雄二の話を聞いていた。しかし、会場がざわざわする様を見ているうちに再び気持ちが昂るのを抑えきれなかった。事実、この考え方を知らされた時に、未来への光が射したように感じ、協議会への復帰の気持ちを固めたのだ。

「その会員費で列車を乗り放題にするということですか？」

「ええ、列車という乗り物についても教えて欲しいのですが、一車両の定員というのは決まっていますでしょうか？」

「いえ、定員というのはあるのですが現状では上限はありません」

「そうですね。鉄道の不思議なところだと思っているのですが、座席と吊り革の数には限りがあって、車両の外部にも定員数が書かれています。現実としては通勤時など乗客が入るだけ乗れるというのが私たちの感覚です」

「それで……、何が言われたいんでしょうか？」この段階に

なっても会社側からは後ろ向きな発言がされる。少し苛立っているように思える。

「いや、感情を害したのなら申し訳ありません。でも、私たちは今までになかったような、全く新しい鉄道の料金制度を用いることでローカル地方の鉄道を維持する方法を提案させていただけなのです」

雄二の声が一段と大きく強くなる。出席者もその発言に興奮している。

「国鉄が民営化された時に、三島の鉄道会社は相当の赤字が見込まれていたことに対し、経営支援基金が準備されました。当初はその運用益でトントンの状態であったと認識していますが、その運用利率が下がり当初の収入が確保できなくなり今の現状になっているかと察します」

「だからどうだと言うんだ。私たちだってその運用益にばかり頼っていたわけじゃない。出来ることについてはずっとやってきたんだ」

雄二はその声を真摯な態度で聞いた。まるで鉄道会社の人間の叫びにも聞こえたからだ。

「北海道鉄道の努力を我々はそして我々以外の道民も十分

理解しています。三島の中でも北海道の人口は少なく、そして札幌に一局集中している。そのような状況でローカル線ごとの収支を判断すれば、赤字になるだろうということは容易に推測できます。そして高速道路網の延伸によりそれは加速された」

「俺たちだって、こんなに道路網が拡張されるとは想定もしていなかった。鉄道の経営を良くしろと言われる一方で、道路はどんどん造られる。俺たち、鉄道会社の人間がこの三十年どんな気持ちで過ごしてきたかは理解出来るでしょう！」

「違います。聞いてください。何度もお伝えしますが、私たちは鉄道会社の味方です。提案の本当の目的は、今赤字のローカル線を会社の弱点ではなく、すばらしい宝に変えたいということですよ」

これまでの協議会である意味敵対してきた関係が払拭できないことを雄二は齒痒く感じる。

「例えば、ここ沼太町の人が札幌まで家族で出かけると思います。今現在、札幌までの列車賃は四千七百元。往復したらほとんど一万円です。家族四人だったら、四万円となり大きな出費で家族連れで気軽に乗れるとは言えない。自動車を持つ

ている家庭であれば、よほどの理由が無ければ自家用車を利用していると思います。逆に都市部の人が地方に出かける場合も一緒に、鉄道運賃が必要ならえに駅からの観光地までのアクセスも考えなければならぬ。泊まりの旅行であれば手荷物のことを考えれば車で出かけた方が都合が良いことばかりです」

会議室の面々はずっと鉄道の利用促進を考えてきたため、この自動車と列車利用の痛いほど理解している。

「鉄道の運賃制度は国鉄から継承したものあり、我々だって極力値上げをしないようにやってきたんだ」

雄二は鉄道会社に問いかけたい核心に踏み込む。

「客観的に考えてみたいのですが、鉄道の発足時には自動車は走っていませんでした。ところが、今では自家用車やトラックが普及し、北海道では無料の高速道路網も整備が進みました。鉄道を囲む環境が大きく変わっているのに、いまだに運賃は変えることもなく距離に比例して高くなる『距離制』をとり続けている。このことが鉄道が衰退した一因ではないかと思うのですがどう思われるでしょうか？」

雄二の言葉にさらに熱がこもる。

「もしも鉄道を乗り放題にすれば、地方から札幌や朝日川のような都市部に列車で買い物や遊びに出かけたいと思う人は増えるはずです。逆に地方の観光地に行くために鉄道パスを使つて出かける人も同様です。つまり人口密度の少ない地区でも収入を上げれるということです。そして、そのためには地方部にも線路がないといけない。身近に駅が無い地区の人が会員にはなつてくれないからです。そこにローカル線の意義が出て来ます」

その言葉は説得力のある内容であつた。しかし、鉄道事業の根幹であう運賃の制度のことに言及されたためか。北海道鉄道会社の出席者は焦りを隠せずに回答が感情的になる。

「そんなこと……、列車がいくら大量輸送機関だと言つて、誰でも乗り放題にしたら札幌近郊なんか通勤時間帯に混雑して列車に乗れない人が出てくるじゃないか」

「確かにそういう線区や時間帯があると思います」

「そんな鉄道では安全は保てない。安全は鉄道事業者の使命であるんだ」

「確かに、鉄道会社としては安全だけは確保しなければならぬ。それは大前提だと思います。でもですね。それは今の

設備が現状の鉄道に合わせた規模でしかないからではないですか？ 国鉄当時のはホームの数や長さはもつとあつたはずです」

「不要な固定資産は減らさないといけなかつた事情があつたのは知つてるでしょう」

「確かに今の設備や列車本数のまま、乗り放題にしたら、区間や時間帯でパンクする場合があるのではないかとも思います。でも、乗客が増えるのであれば設備を拡大していくことは、どこの業界でもやっていることです」

「一度、撤去した設備をまた造れというのか？」

「何度もお伝えしますが、私たちは鉄道会社の味方になりました。このままの鉄道には未来はありません。先ほど言つたとおりローカルな路線を弱点ではなく、広いネットワークという長所、宝に変えたいのです。このことはみなさんの方がいつも考えていらつしやるかと思います。しかし、もしかするとみなさんは過去からのルールや制度に縛られているのではないかと感じます。私たちはみなさんに新しい鉄道を一から創ってもらいたいです。そういう鉄道に対して私たちは資金援助をしたいんです。どうか鉄道会社

みなさんにその点だけは分かってもらいたいです」

気がつくとも雄二の眼には涙が浮かんでいる。今までの協議会では地元の同意も得られずに鉄道会社からの資金の支援要請に応えられずに沈黙を続けるだけであった。

今日の会議にこちらから提案を行うことで、今後の話し合いに一石を投じることが出来ればと思っていた。

「こんなこと、勝手に考えて……出来るわけじゃないか」

鉄道会社の本音とも思える声が会場で聞こえる。鉄道会社の堅い扉は容易には開かれない。さすがに自治体側からも本音と思われる声が上がりはじめ。

「私たちだって、無策のままの鉄道に資金援助を呑むわけにはいかない」

沿線の自治体、鉄道会社の出席者の誰もが感情的になり、相手に対して罵声があがる。雄二は、その状況を見ながら、やはりこの問題には出口がないことを改めて思い知らされる。

「静かに！ みなさん、静かにしてください」

会場の様子をずっとモニター越しに参加していた鈴井で

あったが、突然スピーカー越しに大きくそして迫力のある声が会議室に響く。

会場の誰もが、その声でモニターの知事を見つめる。

「みなさん、落ち着いてください。すいません、私にもう一度発言させてください」

その声には、何かしらの決意が感じられ、会場は一転落ち着きを取り戻す。

「これまでの議論見させていただきました。みなさんありがとうございました。そして、このような熱い議論は久しぶりに見たような気がします」

鈴井は淡々と語った。

「沿線の方がなんとしても鉄道に乗り続けたいという気持ちも分かりましたし、鉄道会社の方もこれまでやれることをやった結果での廃線を決定した無念な気持ちもわかります」
自治体の町たちも会社の人間もおとなしくその言葉を下を向いて噛みしめている。

「私はモニターで参加していた訳ですが、だからこそ双方の意見を少し離れた距離で聞けたような気がします。まず北海道鉄道さんですが、『沼太町は鉄道会社の味方です』って

くり返し言われてましたよ。同じ会議の場にいと場の雰囲気気で気付かなかったかもしれないですが、そのことだけは忘れないでください。彼らは決して敵ではなく一緒に状況を改善したいという味方であることを」

冷静なコメントが鉄道会社の出席者の昂ぶった気持ちに届く。

「私が今回の議論を見ていて思ったことですが、鉄道乗り放題という思い切った発想に心惹かれました。鉄道は大量輸送機関であることをなんとなくは知っていますが、年会費で乗り放題ということは考えたことがありませんでした。それと収入を会員費で稼ぐということ、……八百億円でしたかね。議論では百万人の会員で計算がされていましたが、二百万人の会員を集めれば半分になるということですよ。」

確かに現状の輸送力に見合った適切な会員数があるかとも思いますが、公共交通という性格の鉄道であれば出来るだけ安く設定できれば良いと思います。

私も知事として鉄道が生まれ変われば、北海道の経済もっと活発になるかと思います。景気というのは人と物の動きです。鉄道で人が動けば駅や駅前にビジネスチャンスが生ま

れます。また、駅から観光地へのアクセスも必要となり、路線バス等の交通手段でも新たな需要が生まれるはずです」

雄二には鈴井の気持ちも少し昂ぶっているように聞こえる。これまで燻ぶっていた気持ちを晴らすように発言を続ける。

「なお、今後の経済活動については地球温暖化の問題を無視する訳にもいきません。この点でも鉄道利用促進の追い風になるものと期待できます。日本国内で毎年発生する豪雨災害やここ北海道でも見られるようになった冬の豪雪など異常気象の緩和にもつながるかもしれません。最近では若い世代が環境問題についての関心が高まってきていますので、彼らが公共交通を利用できるように自治体からの補助制度などのしくみづくりも必要になるのではないかと思います。」

そして、熱くなりすぎたような議論でしたが、私はなにか嬉しくて感動しています。本来の会議というものは、相容れない双方がお互いを理解するために本音で議論を交わさなければ、良い結果は生まれないはずです。道議会も、そして国会も同じですが日本人は結果に対しての根回しといいますが、最初から結果ありきの会議が多くて、議論の本来の姿

を忘れてしまっているのではないかと気付かされました」

「ハハハ、本音が出てても結果が出なくちゃ困るだろう……」

「瑠萌線の存続については今まで多くの会議をずっとされてきたと思いますが、今日の会議が真の意味で第一回の会議となったのだと思います。今後、何度も何度も徹底的に議論して必ず出口を見つけましょう！ みなさん、宜しいでしょう？」

北海道鉄道さんには、ぜひ、今日沼太町から提案のあった考え方を専門家の目で実現できるように検討していただきたい。もちろん安全面もです。乗客が増えて危険な場合があるとの意見が出されていましたが、それは時間や区間的な制限なども考えられるのではないですか。また道知事として通勤のピークをずらすために、各企業に勤務時間の変更やリモートワークを推進するようにお願いをしてもよいと考えます」

その鈴井の言葉を雄二は嬉しく聞いた。

「あ、鉄道会社として今後実験的な取り組みをしていく必要があると思いますが、北海道としても、そのような前向きな鉄道に対しては資金援助を惜しまないことを約束します。社

会実験中の収入減があった場合も埋め合わせを行います」

鈴井は鉄道会社に対しても力強い言葉でエールを送った。

「石井さん、ご提案ありがとうございます。あなたが上げてくれた提案はもしかすると、これからの日本人の暮らし方を変えることもあるかもとさえ感じてわくわくしました。道知事としてではなく、私個人としても新しい鉄道に投資を試みたいとさえ思いました。北海道鉄道さんも今は国が株主なわけですが、新しい鉄道には一般の株主からの視点も視野にいれて検討をしていただくようお願いいたします。」

会員制度では鉄道を利用する人が駅まで来るのを待つのではなく、会員募集を積極的に行って収入をあげていくことが出来るのではないのでしょうか。また、会員費で一定額の収入を確保しておいて、さらに付加価値のあるサービスでも収入をアップさせることも出来るし、個人株主とすれば企業としての成長性を見込めるかとも思いますよ」

国鉄の分割民営化後に各鉄道会社は株式上場を目指していたが、北海道と四国及び貨物鉄道については、実現が出来ていない。鈴井の発言は近い将来、北海道鉄道が株式上場を果たすことを予感しているように聞こえる。

「私は夕波里線の廃線を決めた時、一部の人たちから無くさないで欲しいと懇願されました。でも、私にはどうすることも出来なかった。でも今日は、たぶん瑠萌市長が思われたように、私にも希望の光が見えた気がしました。どうですか？北海道鉄道の皆さんはどのように思われたでしょうか？」

「あ、いえ。私たちも何か発想の枠に囚われていたような気はしました。鉄道の運賃制度は国の許可でありますから、安全性の面とか色々と実現には問題があるとは思いますが……」

「そうですね。でも、冒頭に言わせてもらいましたが、高齢化社会の交通の確保、環境問題への対応、そして観光など新しい産業の観点で考えれば、鉄道会員制を検討する価値はかなり高いと思ったのが私の感想です。石井さん、そしてみなさんありがとうございます。私は北海道知事の立場で申しあげますが、瑠萌線がどう変わるかで北海道の鉄道、そして北海道全体の暮らしを変えることが出来るかもしれません。今日はありがとうございました」

「石井さん、今日は良い勉強をさせて頂きました。我々もど

こかで鉄道をあきらめていたんじゃないかと反省もさせられました。あなたたちに提案いただいたアイデアについては持ち帰り、検討させて頂きます」

会社幹部はお礼を込めた言葉で提案を受け入れるように答えた。しかし、『持ち帰る』『検討する』この言葉を雄二も今までに何回も住民説明会などで使ってきただろう。鉄道会社がどこまで今回の提案と真摯に向き合ってくれるかは分からなかった。

会社からのこの発言まで聞いて町長の横田は会議を閉めようとした。挨拶をしようとしたその横田のタイミングを奪うように、会社からの質問が上がった。

「ところで素朴な質問なのですが、沼太町のみなさんは今回のアイデアをどのように発想されたのでしょうか？鉄道を乗り放題にしたらと考えられたのはいったいどのようなことからだったのでしょうか？」

雄二はその質問を聞いた時に伝えられた約束を思い出していた。

「あ、はい、そのことについてですが……今からご説明いたします」

*

「ということなんだけど、いいかな？」

僕と吉田さんは、ある意味絶句していた。一番の身内であり、いつも家では無口な親父が行った行為に感動したからだ。この沼太町の会議室で激熱の議論が交わされたことなど、思いもつかなかった。

「そういうことだったんだ。だから、今北海道鉄道はモニター会員を募集して社会実験をやっているんだ。鉄道を変えたのは親父のアイディアだったんだ」

「いや、違うんだ。俺じゃないんだ。俺は何も考えていないんだ。俺にそのことを教えてくれた人がいるんだ」

「えっ、それは……誰なの？もしかして足毛に住んでいる人？」

話を終えると親父は再び沈黙したままで車の運転を続けた。僕と吉田さんもこれ以上何を話して良いのかわからず黙っていた。



・第七話 春風の吹く町

旧足毛駅は線路が廃止になってからも町が駅舎をリニューアルして観光案内所になっている。利用者が減って廃線が決定されたが、今は自動車で人が多く立ち寄る状況で皮肉な感じが否めない。

駅近くの駐車場に車を止めて、道の反対側にある食堂を僕たちは複雑な気持ちで見つめる。『春待食堂』と書かれた大きな看板が店の入り口の上にかかっている。チラシの写真で見たことのある列車で知り合った老夫婦の店だ。

親父は足毛の街に着く前に、会議で示した提案がこの食堂と関係していることを僕たちに教えてくれた。僕と吉田さんも、そのことを聞いた時にこの食堂との奇異な関係を不思議に思った。

道路を渡り、開き戸のドアをあけて中に入る

「いらつしやいませ」白いエプロンをつけた女性の店員が迎えてくれた。

「三人ですけど」

「空いた席にどうぞ。お水、お持ちしますね」

僕らは道路に面した窓際の席に座った。向かいには旧足毛駅が見えている。

「ああ、いいにおい。夏でもおでんがあるんだ、ここ」

「いいね、何個か頼もうか」

僕と吉田さんは鍋を覗き込み何を食べようかと迷っている間に親父は店の人に尋ね始めた。

「すいません。こちらのご主人は今日はいらつしやいませんか？」

「ご主人……ですか？」

「ご夫婦ですつと食堂をされていた方なんです……」

「ああ、前のお店をやられた方でしょうかね。ちよつと待っててもらえますか」と言つて店の奥の方に声をかける。

「すいません。マスター。ここで以前お店をやられていた人を訪ねてお客さんが来られています、ちよつとよろしいですか？」

店員が再びテーブルを拭き始めて間もなく、雄二と同じ歳くらいの男が店に現れた。

「はい、なんでしょうか？」

「突然すいません。こちらですつとお店をされていた年配の

「ご夫婦をご存じありませんか？」

「ああ、黒岩さんご夫婦のことですかね。あいにくですが、お二人は半年前ほどに亡くなられましたよ」

「えっ？ 亡くなった」

「ええ。今年になって間もない頃だったかな、先におくさんがご病気で亡くなられたんですが、その後にだんなさんも後を追うように立て続けに……」

「そうですか……少しも知りませんでした」

親父は肩をおとし後悔をしている様子に見える。

「私はここから少し離れた場所で食堂をやっていたんですが、お二人が体調を悪くされてお店を閉めるということを知って、私からぜひお店を継がせてもらえないかと相談をさせてもらっていたんです。丁度、その話が決まった直後のことでもあったんです」

おでんを選びながら、親父がお店の人と話すのを聞いていた僕と吉田さんだったが、途中からふたりの話に割り込んだ。「お話中、すいません。あの…、ちょっとお尋ねしますが、このチラシはこちらの食堂のものですか？」

僕はポケットからチラシを出して、その店主に見せた。

「ああ、これは前の旦那さんたちが、店をやられていた時に作ったものですね」

「やっぱりそうなんですね」

「私もこの店の常連でもあったので、おでんなどは引き継いでやらせてもらってるんです」

「あのー、お願いがあるのですが」

僕は心の中もややをはっきりさせたかった。

「亡くなったお二人の写真を、もしお持ちでしたら見せてもらいたいのですが……」

「あく写真ですか。確か店に飾られていたパネルがあつて…、捨てずにどこかにとってあるはずだけだな」

「マスター、私、パネルの場所知ってますよ」

近くで話を聞いていた店員が気を利かせて、店の奥に入っていたかと思うと、大きなパネルを持って戻ってきた。

「このお二人です」

ある程度の予感があったものの、実際にその色褪せたモノクロのパネルを見て僕たちは声を失った。パネルには、お店の従業員の人たちと一緒に写る老夫婦がいた。

「やっぱり、あの時のご夫婦だ」

お店の人たちに囲まれて屈託のない笑顔で写っているのは、まぎれもなくあの日、あの列車で話をした二人であった。

*

再び現れた黒岩の手には北海道鉄道のロゴが入った封筒が握られていた。

「これ、お前がもらってくれないか？」

「何です、これ？」

雄二は封筒の中に手を入れて、中に入っていた分厚い書類を引き出した。

「HRが民営化された直後に俺が考えた鉄道の増収アイデアなんだ。当時、俺は駅で働いていたんだが、このままの鉄道じゃ先が無いって思ってたんで全く違う料金制度を提案してみたんだが、当時の会社では評価されなくてな」

「へえ、どんな内容なんですか？ 興味わきますけど……」

「下手な文書で恥ずかしいが、良かったら一回読んでみてくれないか」

雄二は左上隅にクリップで止められた書類をその場で読

んでみた。作成したのがかなり昔であることを示すように、現代とは違うワープロの文字で書かれている。表紙には「鉄道維新構想〜新しい鉄道の提案について〜」とタイトルが大きく書かれている。

「この文書、全部五郎さんが書いたんですか？」

「ああ、駅業務の時間の合間に少しずつな」

「すごいじゃないですか。初めの方だけしか見てないけど鉄道乗り放題って？ 赤字のローカル線が会社のお荷物から宝に変えたって……これ会社で評価されなかったんですか？」

「ああ、今でも納得はしてないが、当時の営業部長に一蹴されてな。それで終わりさ」

「それはひどい」

「会社はどちらかというと鉄道事業より関連事業で稼ごうとしていたからな」

「でも、本業の鉄道事業の売上げが増えないと関連事業も伸びないでしょう？」

「客観的に考えればそうなんだがな。でも、その後、俺は会社から変わった考えの人間って思われてな。俺からしてみれば

ば、ずっと赤字の鉄道なのに、昔の運賃制度を大切に抱えて少しも変えようとしてもしない頭の堅いやつらばっかりだって腹も立てたよ。とにかくやっていると違うことを言えば、どこの世界でも異端児扱いされるってことだ」

「これを……、私がもらってもいいんでしょうか？」

「ああ、今からお前たちはHRとの協議に入るんだろ？さすがに今の会社がどのように考えているかは分からないが、聞いた限りじゃ廃止することでは会社の経営は良くなるまいと考えているように見えるがな」

「そうですね。私もそう思います。なぜ鉄道会社はもっと収入をあげるような前向きな考え方ができないんでしょうかね」

「いや、会社もやることはやってたとも思うんだ。でも、なにか見えない枠の中で身動きがとれないような感じだった。鉄道事業には運賃制度とか安全のルールとか決められた制度があるからな。その枠を外して考えたかったんだが、そこまでは許してもらえなかったってことだ。俺も、アイディア出したまでがいいが、結局、細かい検証は出来なくてな……、評価されなくても仕方ないと諦めたんだ。

でもな、提案を考えている時は、自分の考えで鉄道を変えられることが出来るってわくわくすることもあったんだ。足毛までの廃線の話が決まった時には、もう少し会社の中で強く言えば良かったと後悔して、実際に線路が無くなった時には、なんかぼっかり穴が開いたようになってな。もう次の駅で働く気も無くなつて、会社を辞めたんだ」

黒岩は当時のことを苦々しく、しかし淡々と雄二に説明した。

「でもな、自分で考えた提案は、まるで自分の子供みたいに思うんだ。だから、この世の中に出来ればお披露目してあげたいと思うんだ」

「五郎さん……」眼にうつすらと涙を浮かべる黒岩の無念は雄二にも明らかだった。

「石ちゃん、お前は今からまた存続協議会の中で瑠萌線の存続問題を担当するんだろ？ 相手がこちらのために、なにかを考えてくれると思ったら大間違いだぞ。民間会社になった今のHRは採算のとれない路線をいつまでも抱えられるような状況じゃない。お前たちが本当に鉄道を存続させたいと思うなら、自分たちから会社に逆に提案をもちかけるくらい

の意気込みを見せないと、足毛までがそうだったように、またずるすると廃線が決まってしまうことになる」

「は、はい。わかりました」

さらに黒岩は雄二に思いがけないに助言を伝えた。

「そして、もしこの提案を沼太や他の沿線自治体と一緒にHRにぶつけるような機会があったとしても、決して元鉄道会社の人間から聞いた考えということを絶対に言っちゃいけない」

「えっ？ どうしてですか」

「俺が会社の経営側の人間だったら、同じ会社の社員が考えたその提案が優れていたら自分が無能だということを認めてしまうようなものだからさ」

「そんな馬鹿な。それじゃ、会社が良くなることなんてあり得ないじゃないですか」

「馬鹿なことって思うだろうが、会社というのはそんなものだ。そんなことは、お前の役場でもたくさんあるんじゃないか？」

自分が勤める町役場の仕事について訊かれて、「違う」と即答は出来なかった。

「若い職員が入ってきて、いきなり仕事のやり方に異を唱えられたら、決して良い気持ちはしないだろう。そして残念だが、誰でも会社が変わるなら自分が辞めた後にやってもらいたいって思いたくなるものさ」

「だから、この提案を相手と話をする時は……、そうだな、なにか住民との意見交換会で出されたアイデアということとで持ち込むんだ。そして、提案をするときは出来るだけ多くの人目に止まるところ……第三者を入れて行うんだ。そうすればHRが提案に対しての回答をせざるを得なくなる」

「いいか、鉄道会社の人間は、けっこうまじめな、いやくそまじめな人間が多いんだ。頭が固くて変わろうということが苦手なんだと俺は思ってる」

「だから、外からこんな考え方も出来ますよって頭をガツンってやらないと、新しい発想は出てこないかもしれない」

「それは困ります」

「石ちゃん、お前は優しい人間だ。でもお前が本当に瑠萌線の廃線を阻止しようと思うんなら、もっと主張しなければいけない。自分が生き残るためには、もっと強くならなければならぬぞ」

*

僕たちは足毛の駅から車で十分ほどの高台にある墓地に
来ていた。目の前にある黒岩さんご夫婦の墓石の前で手を合
わせる。跡を継いだ店主が、古株の従業員に連絡をとって教
えてもらったのだ。

「五郎さん、これで良かったんですかね？ でも、あなたが
言った通りHRは動きだしてくれましたよ。結局、提案は沼
太小の子供たちが動物園の年間パスみたいは何度も列車に
乗りたいって思ったことから、思いついたことになりました
よ」

墓石に語りかける親父はうつすらと笑っている。

「確かに今はまだ社会実験中ですが、いつかこの制度が成功
した時は真実を話してみますね。その時、また足毛に報告に
来ます。あなたのおかげで瑠萌線が生き残る道を見つけるこ
とが出来ました。ありがとうございます」

僕と吉田さんも親父の横で一緒に手を合わせる。眼を閉じ
たまま、あの日の列車のことを思い出していた。ご夫婦はな

ぜ僕たちの前に現れたのだろうか。生まれ変わった鉄道を一
目で良いから見たかったのだろうか。

僕たち若い世代がこれからもずっと瑠萌線を守っていけ
ないと気の引き締まる思いだった。

高台から見える広い日本海を見下ろしながら、僕は背伸び
をした。「ボォーツ」と音がする。遠くに見える海を航行す
る船舶が鳴らしたものであるが、その汽笛の音は、まるで
走るはずのない線路を蒸気機関車が走っているような音に
聞こえた。

「さあ、戻ろうか。今週末は沼太駅前で朝市をするんだろ？」

「うん。僕は今、特産物を確保するので大変だよ」

「なあに、忙しいくらいがいいのさ」

帰りの車は僕が運転した。既に夕陽が沈もうとしている海
を左手に見ながら瑠萌まで戻る。来る時は色々なことが霧に
包まれているように感じていたが、今は晴れ渡ったように感
じる。帰りの車内は明日から新しい鉄道と駅の賑わいをどう
やって作れるかという話題が持ちきりであった。

・エピソード

「おーい石井、急げっ！ もうすぐ列車が来るぞ」

「山本さん、少しは手伝ってくださいよ」

「何言ってるんだ。沼太町の担当はお前だぞ。おれはあくまでもサブだからな」

今日は沼太駅前の広場で駅フェスタが初めて開かれる。僕は地元の農家からたくさんのトマトや米やらを提供してもらって、今日一日ここで沼太町の特産品を宣伝、そして販売する予定だ。駅前の広場にはカラフルなテントやパラソルが立てられて、今までに開催した朝市よりも一段とにぎやかな景色になっている。フェスタに来てくれる人が楽しめるように、北海道内外からの飲食店の出張販売も企画し食べ物の出店が並んでいる。

この駅前フェスタは町の商工会議所が企画し、各自治体や地元企業が協力してくれている。これまでであれば、北海道の田舎町である沼太駅でこのような大きな催しは考えられなかった。どれくらいの人に来てくれるかは分からないが、今回のイベントについては、各自治体の広報誌や北海道鉄道の

ホームページそして地元のテレビ局の情報コーナーで宣伝がずっとされてきた。

「うそ？ “三食すみれラーメン”、来てくれたの？」

「ロイスチョコの出店もあるってよ。なんか手作りチョコが作れるって聞いたよ」

イベントに参加しているスタッフからあちらこちらで驚きの声があがっている。

新しい鉄道を模索するための動きがスタートしてひと月が経った。北海道鉄道は道や自治体の協力のもと三十万人のモニター会員を募り、鉄道乗り放題の社会実験を開始した。モニター会員は年齢構成や会員の居住地ごとにバランスよく配置された。また列車にグループで乗車することを想定し、会員は基本的に二名一組で申し込みとなっている。開始にあたっては都市部、いわゆる札幌近郊での輸送能力のキャパ不足が懸念されたため、安全確保のため一部時間帯の列車に乗車制限をかけて始められた。そのためか大きな混乱を生じることはなく、各線区で時間ごととして駅間ごとにデータが集約されている。北海道鉄道はそのデータをもとに、一か月後に車両の増結およびダイヤの改正を行い輸送能力を増やす

予定と聞いた。

一方、地方のローカル線については、期待以上に利用者が増えていてマスコミの話題となることが多くなった。モニター会員に当選したひとがきっかけとなり彼らの友人、知人と一緒に観光に出かけていると分析がされている。切符を買わなくても列車に乗れる感覚は新鮮であり、人々の間で話題になっている。

各駅の所在地となる沿線自治体は、この動きを見逃さないように駅から観光スポットまでのアクセスを整備したり、駅前で朝市を開催するようになった。

沼太町でもこれまでに二回の朝市を開催し盛況を博したが、沼太町での協議会のこと少しずつ道内そして日本全国でも話題となり、沼太町でのイベントに協力したいという企業が出てきた。そのおかげで今日初めて、大きなイベントのひとつである駅フェスタを北海道鉄道と沼太町が合同開催で行うのである。

このフェスタで町おこしにも力を入れようと説明用のブースを設置し、移住プログラムを推進する役場の職員も宣伝パンフレットを準備している。

僕と山本さんは自分たちのテントの陳列をほぼ終え、一服しているとろだ。

「なにかすごいイベントになりそうですね。明日はグラウンドで“やきものがかり”のミニコンサートがあるから、もつと来る人増えるでしょうね」

「俺さ、やきものがかりの「WE' 11 DO!」って曲が大好きなんだよ。あの曲聴くと、なにか新しい未来を自分たちでつくれるんだって勇気もらえて元気が出るんだ。明日のコンサートで歌ってくれないかな？」

「そうですね。今回、鉄道が変わったのが沼太町からっていうのが、なにか感動的なんですよね」

僕たちはフェスタが始まるのを期待をこめて待った。フェスタは九時二七分に着く深河からの列車の到着で開始される。

「それはそうと、石井。さっき駅カフェの中であかりちゃんの下りに野郎がいっぱい集まってたぞ。たぶん、フェスタで今日はメイド喫茶の衣装を着てたから写真撮らせてくれとか言われてるんじゃないかな？　なんか迷惑しているように見えたんだけど、俺がここ見てるからちよつと行ってこい

よ」

「えっ、本当ですか？」

山本さんにテントのお守りを頼んで駅に向かう。沼太駅には町が出資して駅カフェが設置されているが、今日は特別に札幌のメイド喫茶の協力で、店員がメイドの恰好をしているとのことだった。

吉田さんが店内にいるのを見つける。山本さんが言っていたとおり、客がなにやらしつこく話しかけていることが分かった。

「メイド喫茶だったら、一緒に写真が撮れるんじゃないの？？」

「いえ、すいません。ここはあくまでも駅カフェなので衣装だけです。すいません」

どうやら普通のメイド喫茶と同じようなサービスを強要されているみたいだ。

「連絡先、教えてくれない？」

矢継ぎ早に質問を浴びせたかと思うと、「今度、遊びにこようよ」とナンパ紛いの声までかけているのが聞こえた。吉田さんはかなり困った顔をしている。

「ええ、でも今度の日曜日は……」

彼女の困っている顔をみて、僕はやっと自分の気持ちに気づいたような気がした。いつまでも優柔不断な態度しか取れなかった自分の言動にも愛想をつかし、覚悟を決めた。

「あかり、お店忙しくなかったら、俺たちのテントちよつと手伝ってくれない？」

開きなおったような、何かを悟ったような大きな声を出しながら彼女の方に近づいた。テーブルに座る男性たちと吉田さんまでが、驚いたように僕の方を見た。でも、彼女は僕の顔を見るなり、すぐ理解してくれたようだ。

「あつ、圭ちゃん。良かった。私も手伝おうかって思ってたのよ。どう準備は終わりそう？」

準備は終わっていたが、彼女の問いに合わせようと、

「いや、山本さんが相変わらずで、すぐ居なくなるんで準備が終わらないんだ。手伝ってもらってもいい？」

吉田さんが困っていることを教えてくれて留守番までしてくれている山本さんに心の中で詫びた。

「うん、いいよ。私は駅カフェも助っ人に入ってるだけだから。本当のメイドさんみたいにも出来ないし、圭ちゃんのテ

ントを手伝おうかな？」

僕たちはわざと大きな声で話を続けた。僕たちが話すのを聞いていた彼らは

「じゃまたね。いつか遊びましょ」

と、小さな声を発しながら人ごみに消えていった。

しばらく、彼らの行く方向をふたりで見つめていた。そして、彼女と向き合う。お札を言ってくれるかと思っていたが、また意外な一言だった。

「あかり？ って誰？」

「えっ、えっ？ 駄目だった？」

「いきなり呼び捨て？ 彼氏面ですか？」

「え、いや、何か言い寄られて、困ってたようだったし」

「ふうん。そう見えたんだ。で、助けてあげようと思ったの？」

「そ、そうだよ。悪い？」

「なんで？」

「えっ？」

彼女に対して覚悟を決めたはずだったが、そんなに簡単には変わらない。

「なんで、私を助けたって思ったの？」

隙を見せた僕に対して彼女が強気に出る。

「なんでって、それは君のことが、……す、好きだからだろう！ 悪い？」

「やっど、……言った」

「えっ？」

「やっど好きって言ってくれた」

「やっどって……」

「そうよ。もっと早く言ってくればいいのにつてずうっと思ってた。動物園に行ったときだって、いつまでも『さん』付けでさ」

「あ、あの時は始めてのデートだったし、鉄道のことばかり気になってしまってたから……ごめん」

「私よりも……、鉄道が気になったの？」

「いや、そういう訳じゃないけど……」

「いいよ。許してあげる」

「えっ、いいの？」

「でも、時々好きって言つてよ。心の中で思ってるだけじゃ相手には気持ち伝わらないよ」

「それはそうだけど、こっちはこっちの考えがあるわけで。」

どんなシチュエーションで言おうかって色々考えてるんだから」

「ふうん、そうなんだ」

「そうだよ、男は女が思う以上にロマンチストなんだぞ」

「それは、悪……だったです。ごめんなさい」

「いいよ。勢いで言えたところもあったんで、……で、君は？」

「えっ？」

「君は僕のことを好きなの？ 俺もまだ言われてないけど……」

……

「私？」

「ほら、こんな風に言われたらなんか言いにくいでしょ？」

その言葉に彼女は黙った。そして、しばらく僕の顔を見つめたかと思うと

「ふうん、少しは東京で強い男になって帰ってきたのかな。昔の石井君だったら、そんなこと私に聞けなかったでしょ」

「そうかな」

「そうよ、私はね」

吉田さんは、また僕の顔をじっと見つめたかと思うと、いきなり僕に抱き着いて自分の顔を僕の胸にうずめた。そして

顔をあげて、びっくりしている僕を見上げながら答えた。

「私も石井君のこと、だ〜い好きよ。だいたいだいたい、だ〜い好き。私はいつ聞かれたって言えるわよ」

彼女は今までに見たことのない満面の笑みを見せる。

「どう？ 好きって言われた感想は？」

「あかり……ちゃん」僕も吉田さんの顔を見る。彼女の両肩を手で軽く掴む。彼女と目を合わせ互いに顔を近づける。彼女が僕の背中に腕を巻きつけるのが分かる。ふたり、その場で立ったままの姿勢でお互いに少しずつ近づいていく。

「あかり……」

と、その時。

「お〜い、石井っ！ 列車が着いたぞっ！ 早く並べないと列車来ちゃうぞっ」

たくさん飾られた鮮やかなパラソルの中からバカでかい声が聞こえる。

「んもう。早くしないから」

彼女は残念そうな顔をしたが、逆に楽しそうにも聞こえ、僕は彼女を愛おしく思えた。

今から北海道は本格的な夏を迎える。今年は列車で多くの

この小説はフィクションです。登場する人物、地名、団体名、ストーリー、その他設定などは実在のものとは一切関係なく、架空のものです。

人が観光を楽しむことになるだろう。鉄道は変わり始めた。環境の変化に合わせて、誰もが変わりたいと行動した結果だと思ふ。

でも、いつかまた、大きな試練が待っているかもしれない。その時、僕らはどのように感じ、どのように動くのだろう。いつの時代も変化に合わせて自分たちも変わっていかなければならないのだろう。

しかし、あの日の列車のように人と人が楽しくおしゃべりを楽しんだように、いつの時代も変わらない大切さもあると思ふ。

北海道の冬は長く雪も多い。でもその冬の後には必ず春がやってくることを僕は知っている。

おわり

